

「言語文化」における古典の再発見

加藤 敏かとう さとし

(千葉大学名誉教授)

古典の価値

新課程必修科目の一つである「言語文化」の言語文化という言葉について、新学習指導要領解説には、「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に価値をもつ言語そのものの、つまり文化としての言語」「多様な言語芸術や芸能」とある。しかし、「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた」言語、「多様な言語芸術や芸能」は、はたして不変の社会的、普遍的価値を持ち続けてきたのであろうか。

益田勝実（註）氏は「あらゆる時代に超然たる〈古典〉」というものが、いったい、ありえようか。現代を生きる人間たちが、体内の共鳴板と響かうものを発見しつづける緊張のゆえに、古典は古典として生きる。「古典とは、たえず相貌をかえつづけるものであり、隆替するものである。」と述べている。氏の言のように、いかなる古典も超然とした価値を持ち続けるものではなく、人々が心の共鳴板と響き交わすことで、常

に新たな価値の創造が繰り返されるのであろう。新たな価値、言語文化の創造が、多く既存の言語文化の否定によって可能となることは、例えば唐代の韓愈、柳宗元らの古文運動を想起すれば明らかである。彼ら官僚地主階級出身の者たちは、貴族のエクリチュールであつた四六駢儷（べんれい）文を否定し、載道の具として達意の古文に新たな価値を見いだしたのである。

また、夏目漱石（一八六—一九六）の「思い出す事など」には、「詩の趣は王朝以後の伝習で久しく日本化されて今日に至つたものだから、われわれ位の年輩の日本人の頭からは、容易にこれを奪い去る事ができない。」「余は：何時でもその無作法とその估屈（きうくつ）とを忍んで、風流を這裏（しやうり）に楽しんで悔いざるものである。」とある。彼は漢詩という様式に価値を見いだした。漢詩は、近代的自我を描いて疲れ切つた心を癒す、かけがえのないものとして漱石を支えるとともに、その「風流」の表現、則天去私の表現の営みが、却つて近代的自我を見つめ、考察する視座をひらいたと言えるだろう。

私たちに求められているのは、既存の古典の価値を理解することに泥^{どろ}むのではなく、学習者がそれぞれ古典に新たな価値を見いだすことができる指導の工夫なのであろう。

国語科の根幹は不変

首藤久義氏^(注)は、明治以降、現在までの国語科教育を精査し、新学習指導要領は「科目名が一新されたうえ、各科目の内容が〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕に分けて記述されているために、見かけ上は大変化に見えるが、項目の一つ一つを詳細に比較検討すると、廃止されたり新設されたりした項目は極めて少なく、大変化とは言えない。」

『論理国語』と『言語文化』という科目名が登場したのは、『論理的思考』や『言語文化』を重視する風潮の影響と思われる。が、筋道を立てて考えることも言語文化を大事にすることも以前から重視されていたことであって、内容の大変化ではない。」として、「学習指導要領改訂のたびに教育界は変更点に着目して大騒ぎするが、国語科の根幹に当たる部分は、明治以来変わっていない。」と断言する。私たちを元気づけてくれる言葉である。首藤氏は続いて「目の前にいる生徒の実情をよく見て、能動的・主体的に活動して学習の実があらがるような内容や方法を工夫し続けることである。」と提言している。

古典教育の問題点であった生徒たちの古典離れについては、

新学習指導要領解説にも「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」と指摘されている。〔読むこと〕〔書くこと〕において、言語文化の視点から漢文と近現代の文章を読み比べることや、多様な形で創作することなど、学習者の実情に応じた多様な指導がなされれば、それぞれの興味、関心に応じて古典の価値が見いだされ、却って言語文化への理解が深まってゆくのではあるまいか。

〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕

「言語文化」では知識及び技能の指導、漢文では、例えば訓点・書き下し文・押韻・起承転結などの指導が、それ自体を目的とするようなものとならないように指示されている。

例えば訓読は、読みをひらく営みとして指導したい。杜甫「春望」の「城春草木深（城春にして草木深し）」は二つの文からなる句で、順接の関係で訓読されている。これを仮に逆接の関係として「城春なれども草木深し」と読んでみる。当時、繁栄を極めた都長安は安祿山の軍に占領され、曲江などの行楽地も荒廃し、人影もなかったに相違ない。杜甫がその荒涼たる春景色を眺めていたであろうことに思いを致すと、「町は春になったが、草木が生い茂るばかりである」という

解釈も検討の余地があるだろう。訓読が読みの可能性をひらくのである。

また、書き下し文の指導も「読むこと」「書くこと」に関わるような指導が想定できる。例えば、上田武氏は、陶淵明「飲酒二十首」を用いた訓読・書き下し文の指導において、①「音読みしていく漢語をできる限り耳で聴いてわかる文語調のやまとことばが現代語に置きかえる」②「訓読漢文の文脈を基本的に崩さず」、「漢字はそのまま使用し、辞書をもとにして探りあてた日本語をよみがなの形で傍につける」指導を実践した。次のような生徒の作例が挙げられている。

①廬を結へて人境に在り、而ど車馬にのるものの喧無し。

君に問ふ何ぞ能く爾くなるかと

②廬を結えて人境に在む、而車馬がたずねてくる喧は無い。君に問おう何で能く爾なでいられるな

学習者が、自ら精査・解釈を行っている。「車馬」を「えらいやつ」と訳すところなど、読みを深め、表現し得た喜びが伝わってくる。漢語と和語との関係まで理解が深まる指導である。「言語文化」の授業としても実りある試みであろう。

深く考えじっくり味わう

古典を読む醍醐味は、よく考えて味わっていると、語句の深い意味、思索や叙情の営みが忽然とわかり、古典と共鳴す

るかのように感動が湧き上がってくるところにある。学習者が容易に理解できるようにと懇切な脚注を手当てし、古典教材をあまりにも平易にしてしまうことは、却って古典を読む醍醐味を失わせているのではないか。

加賀栄治氏は嘗て「教科学習において、その本質的なもの・かけがえのないものが、現時点ではともすれば省略と忘却のしうちにあっているように思われる。文章の持つ美しさや思想の深さなど、文を読んで深く考え、じっくり味わわねば、つかみとることができないのに、それは手間取ること、めんどうくさいこととして、死角領域にいれられつつあるのではないか。」と指摘した。

学習者が深く考えじっくり味わえるような「書くこと」「読むこと」の指導を工夫すれば、学習者を古典の再発見へと誘えるのではないか。「言語文化」が、古典の新たな価値を発見し、我が国の言語文化に理解を深める科目として受け入れられることを願ってやまない。

(注1) 益田勝実「古典教育とよばれるもの」(『文学』49、一九〇)

(注2) 首藤久義「高校カリキュラムにおける国語と漢文」学習指導要領改訂の歴史をふまえて今回の改訂をどう受け止めるか」(『中国文化』78、二〇〇)

(注3) 上田武「陶淵明の詩文の読解指導覚え書き——漢文学習における読解と表現を繞って」(『中国文化』38、一九〇)

(注4) 加賀栄治「学校図書館は生存に価するか」(『中国古典定立史』、二〇六)

『論語』の登場人物——孔子とその弟子たち

仲和順
(北海道大学)

1 はじめに

『論語』には、さまざまな人物が登場する。魯国をはじめとする君主や大夫、あるいは隠者、また歴史上の人士なども含まれる。その中で中核をなすのは、いうまでもなく、孔子とその弟子たちである。

いま『史記』孔子世家・仲尼弟子列伝をひもとけば、孔子の弟子は三千人に達し、そのうち六芸に通じた者が七十二人、もしくは七十七人いたという。さらに、優秀な弟子として、德行に顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語に宰我・子貢、政事に冉有・季路(子路)、文学に子游・子夏の、いわゆる四科十哲(四分野十人の優秀者)が掲げられ、その十人は『論語』先進篇にも収録されている。

そうした中で、とりわけ個性豊かで逸材とうたわれたのが、子路・子貢・顔淵である。小文では『論語』におけるこの三人の弟子に着目し、孔子は弟子に対してどのようなに教育したか、また師弟間でどのような交流があったか、概観したい。

2 三人の弟子

子路(姓は仲、名は由。子路は字、またの字は季路。孔子より九歳若い。)

孔子が不惑を迎えたころから、そのもとには若者が次々に入門を願い出た。その中で最初に門をたたいたのが、子路である。もともと仁俠を好んで粗野であったが、弟子入りしたのを契機に、孔子に師事して感化されたという。

勇猛果敢で、かつ正義感が強く、同時に素直で単純な側面

子路



も見られた。そのことは、孔子が乱れた世を憂い、子路に向かって後でともに海に漕ぎ出ようかと慨嘆したところ、自分が誘われたと誤解してぬか喜びしたこと（『論語』公治長篇以下『論語』からの引用は篇名のみを記す）、また、孔子が顔淵に向かって、適切な出処進退ができるのは自分とおまえだけだと賞賛したのを傍で聞き、軍事面では自分が勝ることを評価してもらおうと発言を求めたこと（述而篇）からもうかがえる。

四科では、政事（現在の「政治」と同義）に掲げられるとおり、政治的手腕を有し、魯国の大夫の季氏の宰や衛国の蒲の宰となったが、内乱に巻き込まれて戦死した。

子貢（姓は端木、名は賜、字は子貢は字。孔子より三十一歳若い。）

弟子の中で、特に幅広い知識をもつとともに、巧みな弁論術を発揮したのが、子貢である。そのため、四科のうち、言語に名を留めた。そうした子貢に対して、孔子は、単なる知識だけでなく、一貫した目標をもつことの重要性を語り（衛霊公篇）、また発言よりも行動を優先すべきことを説いたのである（為政篇）。

さらに『史記』貨殖列伝にも収載されるように、子貢は、商才に恵まれ、莫大な財産を築いたとされる。たとえば、子貢が告朔の餼羊という月初めの儀式に供える羊を惜しみ、儀

式を廃止しようとしたところからも（八佾篇）、卓越した経済観念を有したことがうかがえる。

ただ、子貢は、孔子の偉大さを心底、崇拜しており、そのことは、魯国の大夫の叔孫武叔から、孔子より優るのではないかといわれた際、それを全面否定したこと（子張篇）、また、孔子の没後、六年にわたって喪に服したこと（『孟子』滕文公上篇）からも理解できる。



子貢

顔淵（姓は顔、名は回、字は子淵。孔子より三十歳若い。）

数多くの弟子の中、人格的にも学問的にも秀逸で、四科における徳行の筆頭に掲げられたのが、顔淵である。孔子は、顔淵が貧困な生活を送りながらも、精進を重ね、その中に楽しみを見出した点を称えるとともに（雍也篇）、「用舎行蔵」、すなわち時宜を得た出処進退のできる人物と絶賛した（述而篇）。

そのため、顔淵が孔子に先立って夭逝するや、「天、予を喪ぼせり」と慟哭し（先進篇）、さらに死後も、最も学問好きな弟子であったと悲しみ惜しんだのであった（雍也篇・先進篇）。

かように顔淵は、孔子からはもとより、同門の弟子たちからも尊崇されていた。孔子からおまえと顔淵とはどちらが勝るかと問われた子貢は、自分は一を聞いて二を知るだけだが、顔淵は一を聞いて十を知るほどの人物であると答えたという逸話は、そのことをよく物語っている（公冶長篇）。

顔淵



3 「仁」をめぐる問答

ここまで子路・子貢・顔淵について述べてきたが、こうした有能で個性的な弟子に対して、孔子は柔軟に対応しながら教導した。中でも「仁」の徳目については、とりたてて定義することなく、弟子たちの質問にその場で異なる返答をしている。

たとえば、孔子の御者をつとめていた①樊遲（姓は樊、名は須、字は子遲）、徳行として十哲に数えられた②仲弓（姓は冉、名は雍、仲弓は字という）、そして先に掲げた孔門第一の弟子である③顔淵に対して、三者三様の発言を残している。

①樊遲、仁を問ふ。子曰はく「人を愛す」。

②仲弓、仁を問ふ。子曰はく「……己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ」。

③顔淵、仁を問ふ。子曰はく「己に克ちて礼に復るを仁と為す」。

（いずれも顔淵篇）

つまり、孔子は「仁」について、①樊遲には人を愛すること、②仲弓には自分の望まないことは人にしないこと、③顔淵には自分の欲望に打ち勝って礼を実践することと解き明かしたのである。

加えて、①樊遲、②仲弓、③顔淵に説いた内容を比較すると、①②③の順に、「仁」の意味が段階的に高度化していることに気づくであろう。要するに、①は、望ましい行為ではあるが、あくまで自己を中心とした「仁」が、②は、自己のみならず、他者にも配慮した「仁」が、③は、自己はもちろん、それを超えた「礼」という社会規範をも意識した「仁」が説かれているのである。

4 孔子と弟子の「志」

さらに、孔子と弟子たちの日常において、その師弟間の交流をうかがえる場面がある。

顔淵・季路、待す。子曰はく「盍なんぞ各爾おののなんぢの志を言はざる」。子路曰はく「願はくは車馬衣裘いきう、朋友と共にし、これを蔽おほふりて憾うらみ無からん」。顔淵曰はく「願はくは善に伏ほること無く、勞を施すこと無からん」。子路曰はく「願はくは子の志を聞かん」。子曰はく「老者はこれを安んじ、朋友はこれを信じ、少者はこれを懷なつけん」。

(公治長篇)

これは、孔子と弟子の子路・顔淵がくつろいでいたときのことと想像されるが、孔子が二人に「志」を述べるよう促した。子路は、自分の車や馬や着物などを友人と使って、それが傷んでも後悔しないようになりたいといった。顔淵は、よいことを自慢せず、つらいことを人に押しつけないようにしたいといった。それを踏まえて、孔子は、老人からは安心され、友人からは信頼され、若者からは慕われるようになりたいと述べたというのである。

この対話からは、子路・顔淵、そして孔子の「志」がうかがえる。子路は、友人思いで、自分の所有物を一緒に使い、それが傷んでも悔やまないようにしたいという。無論、望ましい行為ではあるが、自分の所有物という意識から離れられ

ないことが知られる。次に顔淵は、自身のことだけでなく、他者がどのような気持ちになるかを考えた上で行動をする誠実な人物をめざしていたことがわかる。さらに、孔子は、老人・友人・若者が何を望んでいるかまで推量し、そうした人々の平穏な社会を願いつつ、行動すること、これこそ「志」であると語ったのである。

まさに真の「志」とは何か、孔子が子路・顔淵に教え諭した様子をうかがい知ることができるが、その対話全体を大観すると、自己↓他者↓社会という三層構造で展開されており、それは前掲の「仁」に対する解説と重複する点をも含めて、きわめて興味深いところである。

5 むすびに

『論語』には、孔子はもとより多数の實在した弟子が登場するが、各々人間味あふれる魅力的な人物ばかりであるため小説を読むかのような錯覚を覚えるほどである。『論語』を通して、孔子の思想を考察するとともに、かように孔子の教育、師弟間の交流といった側面から再読すれば、また新たな発見があるのではなからうか。

孟嘗君という人

たけうち やすひろ
竹内康浩

(北海道教育大学釧路校)

中国の戦国時代を駆け抜けた風雲児というべき人物に孟嘗君^{しょうこうくん}がいます。以下、「鶏鳴狗盗」という熟語の成立に深くかわる人物として知られる彼の詳しい伝記である『史記』孟嘗君列伝によって、この人物について見ていきましょう。

孟嘗君と呼ばれることが多いこの人物、姓名で呼べば田文^{でんぶん}です（?「前三五?」）。彼の父は田嬰^{えい}といい、当時の斉の王室である田氏の出身で、斉の要職を取り仕切っていたとされます。この田嬰には四十余人もの男子があり、身分の低い妾から生まれたのが文でした。彼は五月五日に生まれたのですが、当時の俗説では五月五日生まれの子は不吉で、男ならば父を害し女ならば母を害すると言われていました。そこで父の嬰も「この子は取り上げてはならぬ」と命じたのですが、母は秘かにこの子を養育します。のち、母が成長した文を会わせると、「殺せと命じたはずだ」と嬰は怒ります。文は「五月五日生まれの子はなぜいけないのでしょうか?」と尋ねると、嬰が「その子が成長して家の戸と同じほどの背丈になると父

母を害すると言われていたからだ」と答えたので、文は「人の運命とは天から授かるのですか?それとも家の戸から授かるのか?」と尋ねます。黙り込んだ嬰に対し、さらに「天から授かるのでしたら何も心配はありませんまい。家の戸から授かるのなら、誰も超せないほどに戸を高く作ればよいだけのことです」と文は説きます。子どもながら見事な反論ですね（後述のように彼は背が低かったので家の戸を超す心配はありませんでしたが）。のちにも能力を発揮した文は嬰からその才を認められ、賓客の接待に当たるうちに彼らからの評判も上がり、ついには嬰の封じられていた薛^{せき}の地を受け継ぎます。以降、彼は孟嘗君と呼ばれ、財を惜しまずに人材集めに努め、食客数千人に至るとまで称されました。

この食客たちが問題です。食客は何らかの一芸を売り物として有力者に取り入って保護を受ける存在です。その一芸の内容が千差万別で、学術や雄弁術が上位に位置するのに対し、最も低レベルなのが「鶏鳴狗盗」の類です。鶏鳴狗盗とは、

鶏の鳴き声の物まねがうまい人である鶏鳴と、犬を装って盗みに入る狗盜のことです。いずれも他の秀でた芸には遠く及ぶものではなく、特に狗盜はただの泥棒です。孟嘗君の食客とは、要は無頼の者が大勢押し寄せて世話になっていたというのが実情でしょう。孟嘗君が趙を訪れた際、ある県で「孟嘗君はどれほど立派な風采かと思っていたら、ただのちび助じゃないか」と笑われたので彼は立腹します。すると食客たちは笑った者たちを斬り殺し、ついには住民を皆殺しにして県を滅ぼしてしまいました（中国の県は日本でいう市町村クラスの規模です）。食客たちが無法者ぞろいであつたことがわかります。『史記』の著者である司馬遷は薛を通りかかった際に町に乱暴者が多いことに気がついて、土地の者に聞くと、「孟嘗君が無法者たちを集めてここに住ませた結果だ」との答え。孟嘗君からおよそ二百年後にも影響が残つたのです。孟嘗君が齊王から罷免されると、さても多数いた食客たちは彼のもとを去ってみないなくなつてしまいました。一人残つた馮驩ふうかんのおかげで彼はまた齊での地位を取り戻しますが、彼を見捨てた食客たちについて「あんなに面倒を見てやつたのに、自分がクビになつたと聞くや、客はみな去つて行つた。もしぬけぬけと戻ってくるやつがいたら、必ず顔に唾を吐いて罵つてやろうぞ」と恨み言を言います。それに対し馮驩は「売り物があればこそ人は集まるのであつて、物がなければ

誰も見向きもしないのは当然の理屈。恨んではなりません」と諫めます。孟嘗君としては面倒を見て恩を売つたつもりだつたのですが、食客にしてみれば自らの持つ芸に対する見返りという単なる「契約」的な意識であつたわけです。このあたりの人情の機微には、なかなか悲哀を覚えます。浮き沈みをいろいろ経験したはずの孟嘗君ですが、人間について十分に学んだとは言えなかつたかもしれません。

彼はのちに齊から離れて自立した諸侯（薛公）となり、その立場で亡くなります。没年も年齢も確かなことはわかりません。息子たちが薛公の地位をめぐつて争うと、齊と魏が共同で薛を滅ぼしました。孟嘗君の跡継ぎは絶え、残つていません。子孫には戦国を生き抜く能力はなかつたのでしょう。

最後に、鶏鳴狗盜の話には不審な点があります。孟嘗君が秦に行く際、食客たちをみな連れて行けたでしょうか。数千人の暴力集団である食客たちを連れた孟嘗君を、秦がそのまま受け入れて都に置くでしょうか。一部の者、特に孟嘗君が敵国秦に滞在中頼りとする者を選んで連れて行つたのなら、鶏鳴狗盜の如き輩はその中には入らないでしょうから、彼らは秦には同行させてもらえなかつたのではないのでしょうか。とすると、この話自体が実話ではないということになりますね。書物に見える孟嘗君はまさに戦国時代にふさわしい風雲児ですが、どこまでが実体なのか、謎の人物でもあります。

唐代の詩人たちの人間関係と身分

佐藤正光
（東京学芸大学）

1 詩人たちの人間関係を考える視点

唐代の詩に限らず、教材として作品を扱うとき個々の作品と詩人をばらばらに扱ってしまうことが多い。このように考えてみたかどうか。李白は701年に生まれているから西暦の下二桁と年齢は同じ、62歳で逝去したので762年卒。杜甫は李白より11歳年下の712年生まれ、770年に逝去したので59歳。白居易はその2年後の生まれ（772年）、75歳で逝去したので846年卒、と。

これを踏まえると、李白と杜甫の人生に最大の影響を与えた安祿山の乱の勃発は755年、つまり李白55歳、11歳引けば杜甫44歳のこととわかる。王維も仲間に入れると李白の2歳年長で699年生まれ、李白の1年前に逝去したので761年卒の63歳。安祿山の乱は57歳のときとなる（王維の生卒年には他説もある）。生卒年を覚えることは一見意味のないことのように思われるが、人と人をつなぐ発想のきつかけとなる。

755〜6年の三人はどんな状況にあっただろう。李白は江南から江州（江西省）の廬山に逃れて隠棲し、永王李璣の招きに応じて幕府に加わる。王維は給事中（門下省に属する要職で、政令の遺失を正す）となったが反乱軍に捕まり洛陽で偽官（賊軍の官位）を与えられていた。杜甫は家族を鄜州（長安の北方にある町）に逃して肅宗の行在に向かう途中捕えられ、長安に幽閉された。それぞれが違う場所で各自の運命に翻弄される。王維は唐軍に救われたのち、洛陽の獄中で表した「凝碧池の作」が王朝への誠意を示す証とされた。杜甫は幽閉中に著した「春望」、「月夜」が代表作となる。李白は反乱軍（李璣は謀反を起こした）の一味として潯陽（江州の府治）の獄中に繋がれ、夜郎（貴州）に流されかけて「早に白帝城を発す」を著した（制作年には他説もある）。

年代を軸に詩人たちを捉えようと、大乱の中での各自の運命の様子が見て取れる。さらに挙げれば、乱の二年前、753年に王維は宮中で阿倍仲麻呂（中国名、晁衡）の帰国に際し

「秘書晁監の日本に還るを送る」を送っていた。同年、李白は仲麻呂が遭難したという訃報を聞いて「晁卿衡を哭す」を著した。各詩人の生卒年を考慮することは、詩人のその時の居場所や立場、年齢などを歴史の横軸として捉える観点につながっていることに留意すべきであろう。それが詩人たちの関係性の把握にも役立ってくる。

2 詩人たちの立場

それでは詩人たちは社会的にはどのような立場にいたのだろうか。当時の社会では「立場」とは身分（出身の家柄）と地位を意味する。例えば、杜甫の家は漢代まで遡る旧家とされるが父は地方官で、富裕な家庭ではなかった。しかしそれは由緒ある家柄という矜持、官僚となるための学問の知識、家族や親族を重んじる儒教道徳を杜甫の心に根づかせた。知識人は高貴な人が主催する宴席や交遊などに招かれ、そこで才能を披露するよう求められる。詩人は詩を披露し、それが評価されると世に認められることになる。それは詩人を見出した者の評価ともなるため、庇護者が現れたり、親族が後ろ盾となったりして科挙（官吏登用試験）に合格するまで生活を見てくれる。

家柄がない詩人、つまり父が早世し親族もなく家族を抱えている場合には貧窮の中で学問を頼りに科挙に合格するか、節度使（地方長官）や將軍府（將軍が所有する幕府）の事務

官となつて生活を支えながら詩を創作した。実際の意味は逆で、仕官こそが人生の目標、詩は人間関係を築くための手段。ただ時には感慨を著して、自身の慰めとするものだった。

李白は西域との交易商人の元締の家に生まれ、商人の子なので科挙の受験資格がなかったとされる（出自、受験資格については各説ある）。金銭には不自由せず、青年期には隱者を気取つて山で修行し無頼だったが学問は積んでいた。のち詩才により玄宗に召され宮廷詩人となる。素行の問題から追放となるが、翰林供奉（翰林院の定員外の官）という地位は一生残るので「李翰林」と称された。李白が地方に行けば、その名士が招待して酒肴を振る舞い、李白も詩を贈った。

白居易は代々地方官を務めた家に生まれ、やはり勉学で身を立てることを目指した。しかし科挙受験期に父が亡くなつて家族は困窮したとされる。それでも白居易は科挙に合格して新進気鋭の官僚となる。「新樂府五十首」は政治批判、社会諷刺を意図していた。詩は当時、詩人にとって社会的影響が期待されるものとも考えられていたことがわかる。

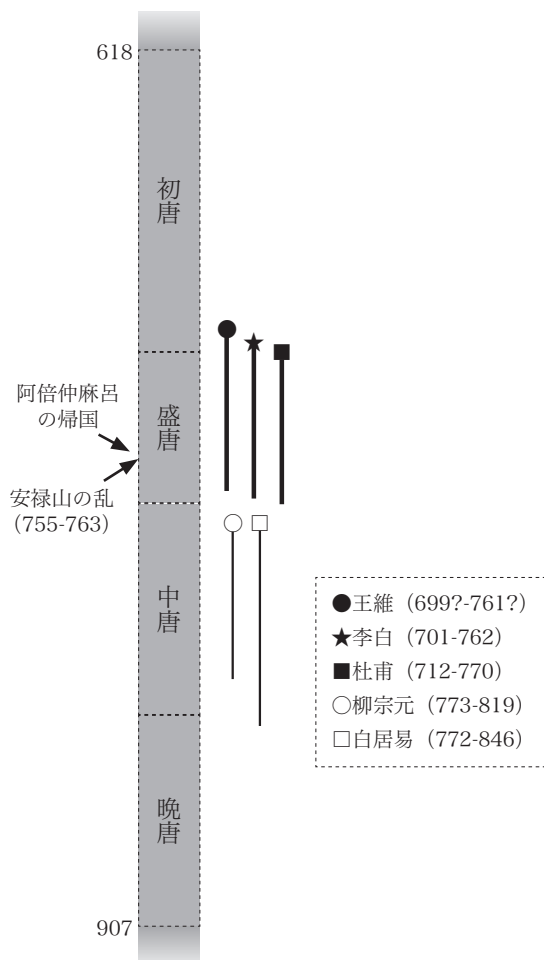
このように多くの詩人は家柄によつて必然的に学問に励む知識人となり、官僚生活の浮き沈みの中で交情や感慨を詩に著した。また官僚になれず、戦乱に遭つて流浪する中で名士や友人の庇護の御札に詩を贈ったり、自身の感慨を詩に著したりもした。

詩人は官僚というしがらみの中で、あるいは運命に翻弄されて、大概は不遇に生きたのだった。宋の歐陽修は「梅聖俞詩集序」で次のように述べている。

内有憂思感憤之鬱積、其興於怨刺、以道羈臣寡婦之所嘆、而写人情之難言。蓋愈窮則愈工。然則非詩之能窮人、殆窮者而後工也

内に憂思感憤の鬱積有り、其れ怨刺を興し、以て羈臣寡婦の嘆く所を道い、人情の言い難きを写す。蓋し愈窮

すれば則ち愈工なり。然らば則ち詩の能く人を窮するに非ず、殆んど窮する者にして後に工なるなり。心のなかに憂いや不満がたまつて、それが怨恨や諷刺という形となり、旅の役人や夫のいない妻の悲しみを代弁し、人の心の言にくいことを書き記させる。貧しさに困れば困るほど文章は上手くなる。とすれば、詩作が人を貧窮にさせるのではなく、貧窮したものをこそ詩が上手くなるのであるうと。



唐代(六八一九)は、文学史上次の四期に分けられる。

初唐 (約一〇〇年間)
盛唐 (約五〇年間)
中唐 (約七〇年間)
晩唐 (約七〇年間)

クエスチョン & アンサー

漢字・漢語の知識を活かす

Q 高校生になると漢字・漢文学習のモチベーションが上がらないようです。

ただの暗記で終わらせない漢字・漢文学習の方法はないでしょうか。

A 笹原宏之

(早稲田大学)

漢文は、パズルのように楽しいという人がある一方で、漢字の羅列に見えて圧倒されてしまうという生徒が多い。試験にはそこそこ対応できても、実は語法や句法が身につけておらず、読解が正確にできない人も少なくない。

皆がすでに知っている熟語には、実はすでに漢文の基礎が詰まっている。ここでは、それを利用した学習について考えてみよう。

漢文では、「不」は動詞などを否定する。

「駢不逝」は「駢逝かず」と訓読するし、熟語だと「不正」のように音読みにする。

「不正」を縮めた漢字が「歪」(ゆがむ、ひずむの意)である。「不得已」は訓読した「已むを得ず」で定着した。四字熟語の「不得要領」は「要領を得ず」と訓読できる。和語の地名に漢文訓読の影響が及んだのが

「親不知」「不忍池」「無」「未」などの否定詞にも、これに類する熟語や地名がある。

「終焉」「快哉」のように、助字が熟語にそのまま入ることもある。このほか「以心伝心」「傍若無人」などの訓読を考えさせ

てみるのもよい。

漢詩の押韻が現代人にピンとこないのは無理もない。でも同じ韻をもつ字を重ねる疊韻の語は皆知っている。「混 kōn 沌 tōn」(広東の方言で読めばワンタン)は、頭子音を除けばオン・オンと韻を踏んでいると分かるオノマトペとしてできた熟語だ。「朦朧 mōn 朧 tōn」もオウ・オウ。「彷徨」(道遙)も(日本では)同様。「艱難」「辟易」も一緒だ。実は疊韻の語には押韻の規則が定まる前にできた古い熟語が多いのだが、音を重ねるという考え方は同じだ。

字義では同義の反復が重言のようで面白い。「思念」は「思」も「念」も「おもいう」の意で「思念ふべし」となる。熟語では「道路」もそうだ。身の回りを見れば「京都府」「測量計」は偶然だが、「切磋琢磨」「權謀術数」はこのパターンである。

すでに持っている知識を応用すれば、一見難しそうな漢文も構造は簡単だと気がつくものだ。組み合わせの原則を見抜きながら楽しく考えていこう。

中国の詩跡

松原 朗
まつばら あきら
(専修大学)

詩跡という概念が初めて書物の形で提示されたのは、松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九一年）の第三部「名詩のふるさと（詩跡）」（担当…植木久行）だった。その後の詩跡研究の成果は、植木久行編『中国詩跡事典』（研文出版、二〇〇五年）にまとめられており、両者を合わせ読めば大概のこととは分かる。なお詩跡については、後者の「序に代えて」に「中国古典詩に見られる、歌枕・俳枕と同様の役割を果たす詩語、いいかえれば、詩歌に詠まれて著名となり、独特のイメージを喚起する、表現の核となる具体的な地名（場所）」と説明されている。

漢文の教科書に登場する唐詩は、詩跡を詠み込んだものが実に多い。杜甫の「岳陽楼に登る」、王之涣の「鶴鵲楼に登る」、崔顥の「黃鶴楼」や李白の「黃鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」、張継の「楓橋夜泊」、李白「廬山の瀑布を望む」や白居易の「香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す」、李白の「早に白帝城を発す」等は漢

文の教科書を賑やかす名作だが、その岳陽楼・鶴鵲楼・黃鶴楼・楓橋・廬山（香炉峰）・白帝城（三峽）などが詩跡である。詩跡は、イメージの喚起力が強く、また旅先で作られた詩には独特の緊張感がただようために、有名な詩はおのずとここに集まることになる。

「詩跡」という概念の歴史は古くない。それまでは名勝古跡などと呼ばれてきたが、しかし景色のよいところ、古い歴史を有する土地がそのまま詩跡になるわけではない。詩跡とは、詩に詠まれることで人々に記憶されるようになった場所である。だから屁理屈を言えば、景色も格別すぐれず、歴史の記憶もない平凡な場所が、名詩の出現によって詩跡となることもある。一例に、李白の七絶「汪倫に贈る」に登場する「桃花潭」という詩跡がある。

李白乗舟将欲行 李白舟に乗りて将に行かんと欲す
忽聞岸上踏歌声 忽ち聞く岸上踏歌の声
桃花潭水深千尺 桃花潭水深さ千尺

不及汪倫送我情 及ばず 汪倫の我を送るの情に

桃花潭は今でこそ固有名詞のふりをしているが、李白の詩では、桃の花が美しい川辺というほどの意味だろう。それまでは誰も詩に詠もうとしたことのない村はずれ場所が、李白の詩によって俄然、人々の詩興をそそる詩跡と化したのである。これなどはいわゆる名勝古跡とはまるで違っている。

詩跡は、分かりやすくは「漢詩の歌枕」と説明される。しかし歌枕とは決定的に違うところがある。歌枕は、現地を踏まえずに「居ながらにして詠む」幻想の文学地誌であるのに対して、詩跡は、現地を踏まえて詩に詠まれる。京の都を生涯ほとんど離れることのなかった平安貴族と、唐代の詩人とは、生活空間の広がりが違っていた。私たちは、唐代の詩人たちは旅を目的に旅をしていたように考えがちである。例えば西行のように、また芭蕉のように。しかし実態は、科挙受験や地方官への赴任など必要に迫られて旅をした。いわゆる左遷も、地方官赴任の一形態だった。詩跡は多くの場合、そのような用事のある旅の途上で詩に詠まれた。

代表的な詩跡となった岳陽楼・黄鶴楼・鸛鵲楼などの所在地を見ると、見事に幹線道路上に位置している。岳陽楼は、長江に接する洞庭湖の北端にあり、ここから洞庭湖を渡って湘水を遡り、中国南部（湖南・嶺南地方）に向かう経路に当たっている。黄鶴楼のある武漢は、長江最大の支流の漢江と

長江の合流点にあり、長安から長江下流方面に旅するときに通過する場所にあった。また鸛鵲楼は、長安から東北方面（山西・河北）に向かうときに必ず通る黄河の渡場にあった。詩人たちは旅の途中でこれらの楼台にひとり立ち寄り、あるいは当地の文人たちと楼上に酒席を設けて詩囊を肥やした。

付け加えれば、張継の「楓橋夜泊」に詠まれた蘇州の楓橋は、今でいう北京から、南は杭州に達するいわゆる隋の大運河に架かった橋であり、この大運河を人々は南へ北へと行き交っていた。そして廬山は、長江と接する鄱陽湖の北端に位置し、中国の東南部（江西・福建）に通じる経路にあった。このように詩跡の多くは、旅を急ぐ詩人たちが決まって通る要地を選ぶように分布していたのである。

とはいえ旅のための旅も、皆無ではなかった。李白は、道教の修行を兼ねて各地の名山を訪ね歩いたし、孟浩然や若き日の杜甫は呉越（長江下流）に長旅に出かけている。そうした旅のための旅の代表的な目的地は、何をおいても越（浙江省）だった。ここには王羲之の「蘭亭」、出仕前の謝安が隠棲した「東山」など、南朝貴族にゆかりの故地がひしめいており、唐代の詩人たちは、滅び去った南朝の貴族文化を偲びつつこの地に足を向けた。今日、浙江省の文化人たちが「絲綢之路（シルクロード）」の向こうを張って「唐詩之路」を宣伝しようとするのも、故あつてのことである。

漢文の教科書に女性詩人が登場しないのはなぜか

野村鮎子^{のむらあゆこ}

(奈良女子大学)

中学・高校の漢文の教科書に、女性詩人はほとんど登場しない。今まさに嫁ごうとする乙女のみずみずしい美しさを歌った『詩経』の「桃夭^{とうよう}」、虞美人^{ぐびじん}との別れを惜しんだ項羽の「垓下の歌」、遠く離れた妻を思う杜甫の「月夜」、楊貴妃の悲恋を詠じた白楽天の「長恨歌」など、漢詩漢文に女性が登場することは多いのに、なぜ女性自身の作品はないのか？

このことを理解するには、まず中国文学の担い手はどういう層であつたかということを押さえておく必要がある。封建時代、漢字を使いこなすことができたのは、ごく一部の支配者層すなわち貴族や士大夫と呼ばれる人たちに限られていた。支配者階級の家に生まれた女性はある程度読み書きができたが、漢字は種類も多く、習得に時間がかかる。日本ではひらがなという表音文字の発明によって、女性も自ら歌を書きつけることができるようになったが、中国では約七〇年前の中華人民共和国建国直後でも女性の識字率は五〜一〇%程度だったといわれている。それ以前は推して知るべしである。

また、詩や文を創作するためには古典に通曉している必要がある。和歌も本歌取りや見立てなどには文学的素養が必要とされるが、中国の場合、典故となる語句は経書や諸子百家、辞賦、歴代の詩文集と幅広く、その質や量は何十倍にも及ぶ。これらは、士大夫にとっては科挙に合格して官僚となるための必須の教養であつたが、女性にとってはそうではない。むしろ時代が下ると「女子の才無きはすなわち是れ徳^{とく}」といった女性の無学を推奨するような言説も生まれた。

さらに、和歌もそうだが、詩作にはそれを贈り、品評し、唱和する相手と、それを可能にする公の場が必要である。しかし、中国の儒教規範は男女の別を説き、支配者階級の女性が夫以外の男性と直接言葉を交わしたり、書簡をやりとりすることは許されなかった。例外もある。唐代の女性詩人である薛涛^{せうたう}や魚玄機は、前者は妓女、後者は女道士（当時は妓女と等しい）であつたため士大夫と対等に交友できた。

ただ、文字を知らなくても詩歌は人の心を種として生まれ

る。素朴な感情を歌うのに学問や凝った修辭は無用である。たとえば『詩經』国風はもとと紀元前、中原の各地で生まれた民間の歌謡だが、その中には女性が歌ったものも含まれている。また漢代の楽府^{がふ}と呼ばれる歌謡の主な歌い手は女性であつたろう。しかし、それを文字に書き留めたのは男性知識人であり、女性の名は歴史の中に埋没してしまつたのである。閨怨詩とよばれる、閨^{むすね}で一人男の不実を怨む内容の詩についても、中国ではやがて男性が女性になりかわつて創作するようになる。出征した夫の帰りを待つ妻の思いを歌つた李白「子夜呉歌」はそうした詩の一つである。

一方、歌謡の分野では女性はやはりその主要な担い手であり続けた。宋代には歌の歌詞に相当する詞^つというジャンルの文芸が發展したが、この時期、李清照という不世出の女性詞^し人が誕生する。彼女は文人官僚の娘で、夫と対等に学問を論じるほどの教養を有していたが、北宋末の戦乱の中、夫を喪い、南方を流浪する。作品には閨怨の枠にとどまらぬ深い情念と豊かな理知があり、宋词を代表する詞人でもある。もし中国古典の女性作家を一人挙げるとすれば李清照をおいてほかはない。しかし、詞は平仄や押韻が複雑なうえ、訓読にはなじまないこともあり、日本人にはなじみが薄い。日本文学に与えた影響という点でも唐詩に遠く及ばない。そのため国語の古典漢文の教科書に、宋词は収録されないのである。

実は、中国文学史において女性詩人の存在が「再発見」されたのは辛亥革命後のことである。一九一六年、謝无量^{しゃむりやう}が『中国婦女文学史』という中国初の女性文学史を発表。続いて一九二七年に梁乙真の『清代婦女文学史』、一九三〇年に譚正璧『中国女性的文学生活』が出版される。彼らはいずれも民国期の進歩的男性知識人であり、その関心は女子教育の普及や女性の地位の向上にあつた。文学史においても男女同等を旨指したのだ。それ以前、文学の担い手は男性であり、詩人とは男性のことであることは自明の理であつた。彼らの著書が表現者としての女性に光を当てた功績は大きい。

その後、一九五七年には胡文楷が女性の著作集を集めた目録『歷代婦女著作考』を出版。ここには皇后から妓女まで四二九〇名の女性が採録されている。そのうち四〇〇〇名以上が明清時代の女性である。明清時代には文化の先進地域である江南地方を中心に、士大夫階級に属する女性たちが詩文の創作に励み、母娘や姉妹、親戚の女性同士で作品をやりとりする文化が生まれた。近年、ジェンダーやフェミニズムの視点からこの時期の女性詩人、女性作家について研究しようという潮流が生まれている。

私は、漢文の授業を通じて中国の古典に出会った高校生が、教科書の中の女性の不在に気づき、中国古典文学と女性という沃土に足を踏み入れてくれることを密かに期待している。

落語と中国の笑話

興膳 宏
(京都大学名誉教授)

高校生のころ、漢文とは四角四面な堅苦しいものだと思っていた。漢文の教材といえ、すべてお説教の材料にされるという印象さえあった。だが、自分が中国古典の研究者になってみると、中国古代の道を説く賢人たちも、決してガチガチのリゴリストではないことが分かってきた。

「助長」の語源となった『孟子』公孫丑篇の、苗の生長を助けるために苗を引っぱり、かえって苗を枯らしてしまった人の話は、教科書にもよく取られるが、これは一種の笑話である。また同離婁篇の、「一妻一妾」を抱えて自分を実力以上にひけらかそうとする見栄張り男の話などは、付された教訓を別にすれば、りっぱなコントとして読める。他方、奇想天外なホラ話に満ちているのは、『莊子』である。巻頭逍遙遊篇の鯢こんから鵬ほうへの変身に始まり、応帝王篇の渾沌に七竅しちきやうを穿つ話に至るまで、桁外れの想像力を掻きたてる話に事欠かない。大らかなユーモリスの側面から中国の古典を見おろす視点で、漢文の世界を一変させる。

日本の伝統芸能との関連でいえば、江戸時代中期以降に発展した落語には、意外ともいえるほど中国ダネの話がある。「既焚うまやけたり」とは、孔子の馬小屋が火事になったことを述べる『論語』郷党篇の条だが、これが八代目桂文楽の十八番だった落語「既火事」の原拠になったことはよく知られる。

少なからぬ落語にタネを提供したのは、明代以降の中国の笑話である。それらが江戸期に和製の笑話に取りこまれて、落語に素材を提供したのである。中でも有名なものは、「饅頭こわい」だろう。タネは明後期の随筆集である謝肇淛しゃちやうせ『五雜組』事部四、及び馮夢龍ふうぼうりゆう『笑府』にある。同じ話だが、文章は異なる。いま『五雜組』所収のものを訓読によって引いてみよう。

窮書生に饅頭を食らわんと欲する者有り。計るに従りて得る無し。一日、市肆しつに列ねて鬻ひきぐ者有るを見て、輒たちち大いに叫びて地に仆たおす。主人驚きて問うに、曰わく「吾饅頭おそを畏る」と。主人曰わく、「安くんぞ是れ有らんや」

と。乃ち饅頭百枚を設けて、空室中に置き、之を閉ざして、外より伺うに、寂として声を聞かず。壁に穴あけて之を窺えば、則ち過半を食らえり。亟ち門を開き、其の故を詰すに、曰わく、「吾今日此を見て、忽ち自ずから畏れず」と。主人其の詐りなるを知り、怒りて叱りて曰わく、「若し尚お畏るもの有るか」と。曰わく、「更に臘茶の両碗を畏るのみ」と。

「計るに従りて得る無し」（手に入れる方法が見つからないの意）など、馴染みのない表現はあるにせよ、大筋として話の内容は理解できるのではないか。オチの部分の「臘茶」は、『笑府』では「苦茶」になっている。「濃くて苦いお茶」である。

小話の主人公は「窮書生」（貧乏書生）だが、落語では、町内の若い衆の寄り合いに噺の場が設定されている。がやがやと話しているうちに、「怖いものは何か」という話題に花が咲く。皆がへびだカエルだと騒ぐ中、黙って聞いていた松公が、「何をくだらないものを怖がつて」と一同をバカにして、「おれは怖いものなどない」とうそぶく。なおもしつくく問いつめられて、「そういえば饅頭が怖い」と白状し、饅頭を思い出すだけで気分が悪くなったといつて、隣室で寝こんでしまった。日ごろから松公を生意気な奴だと思っていた一同は、この機会にこらしめてやろうと、てんでにいろいろな饅頭を買ってきて、枕元に積み上げる。外から様子をうか

がっていると、「怖い、怖い」といいながら、松公は次々と饅頭を平らげている。これは一杯食われたと気づいて、「本当は何が怖いんだ」。「ここいらで良いお茶が一杯怖いや」。サゲは三代目桂三木助の口演筆記（『桂三木助集』、一七三年、青蛙房）によったが、噺の骨格は中国笑話とほとんど変わらない。噺家の腕の見せどころは、前半の怖いものづくしと、後半の松公の大げさな怖がりようで、工夫次第でいくらでもくすぐりやギャグが入れられる。筋は分かっているながら、この噺が広く人気を得ているゆえんであろうか。

『笑府』はこの他にも、いろいろと落語の原話となる題材を提供している。次の「性緩」と題する話もその一つだが、さて何という落語かお分かりだろうか。

一人性緩なり。冬日人と共に爐を囲むに、人の裳尾火の焼く所と為る。乃ち曰わく、「一事有りて之を見ること已に久しきも、言わんと欲すれば君の性急なるを恐る。然らずんば又君を傷つけんことを恐る。然らば則ち言うの是なるや、言わざるの是なるや」と。人何事ぞやと問うに、曰わく、「火君の裳を焼く」と。其の人遽かに衣を収めて怒りて曰わく、「何ぞ早く言わざる」と。曰う、「我君の性急なりと道いしに、果たして然り」と。気の長い男と、気の短い男のちぐはぐなやりとりとまでヒントをいえば、もうお分かりだろうか。そう、五代目柳家小

さんが得意としていた「長短」である。小さんの口演では、長さんというのんびりした男と、短七というせっかちな男の問答になっていて、短七の袂の袖口が焦げたのは、囲炉裏の火ではなく、煙管からこぼれた火玉が原因である。二人は正反対の性格ながら、どこかでウマが合っている。

このほか、「三軒長屋」や「松山鏡」など、『笑府』から落語に取り入れられた作品はまだまだある。その詳しい考察については、武藤禎夫『定本落語三百題』（二〇〇七年、岩波書店）のような研究書も出ているので、参照されたい。

落語のために素材を提供したのは笑話だけではない。もう少し別の角度から中国古典との関連を検討してみることも必要だろう。

唐の詩人崔顥^{さいこう}に、「黄鶴楼」という有名な七言律詩がある。黄鶴楼は、湖北省の省都武漢に今も再建されて存する楼閣で、観光名所になっている。ここから仙人が鶴に乗って飛び立ったという伝説にちなむ詩で、前半四句は次の通り。

昔人已^い白雲に乗って去り 此の地空しく余す 黄鶴楼
黄鶴一たび去って復た返らず 白雲千載空しく悠悠
これにはいろいろ尾ひれのついたいくつかの伝説があるが、最もよく知られるのは次のような話である。

昔、辛なにがしという人がここで酒屋を開いていたが、あるとき、一人の仙人が現われて、酒を所望した。あるじは請

われるままに、半年もただで酒を飲ませてやった。仙人はこの地を去るとき、酒代が払えないからといって、代わりに壁に鶴の絵を描いて行つた。その後、酔客が手を打って歌うと、画中の鶴が舞い出す。それが評判を呼んで、店は大繁盛した。十年ほど経つたある日、例の仙人がふらりと現われると、画中の鶴にまたがり、白雲に乗じていずともなく飛び去つた。辛氏はそこに楼閣を建て、黄鶴楼と名づけた。

この「黄鶴」を「雀」に代えると、そのまま落語「抜け雀」になる。小田原宿のしがない宿屋に泊まった客が、長逗留を決めこみ、一日中酒ばかり飲んで、少しも宿賃を払わない。業を煮やした亭主が催促すると、実は一文なしだが、自分は絵師なので、宿賃の代償として衝立^{つゑだて}に絵を描いてやろうといい、五羽の雀を描いて立ち去つた。翌朝、雨戸を開けて朝日が射しこむと、雀たちは一斉に外へ飛び出し、餌をあさると、帰ってきて衝立にびたりと納まった。これが評判になって、宿屋には大勢の客が押しよせるようになった。

話はまだ続くのだが、この話の骨格は黄鶴楼伝説そっくりである。ただし黄鶴楼伝説を意図的に模したというよりは、おそらく日本の民話にも同様の発想になる話があり、どこかで二つの話が融合してこの物語が形成されたのではないか。その過程はまだ明らかにされていない。わたしの素人料簡だが、日本民話研究からのアプローチがぜひ欲しいところだ。

中国の古典と日本

高橋 智
たかはし さとし
(慶應義塾大学)

わが国に於ける図書文化の原点を探ろうとするときに、第一に挙げられるのが、現在、皇室文化資料を編纂・保管している宮内庁の書陵部である。ここはもと図書寮^{ずしやうきやう}と称し、遡れば一千数百年の歴史を持つ。原点はまさに此処に存する。古く、わが国は、大陸への往来、また渡来人の力によって、仮名・漢字の両様を用い、大陸書物文化を吸収したが、その痕跡は、典籍の書写・形態（装丁や料紙）・読法（訓読）に遺される。そしてその痕跡を余すところなく伝えてるのが図書寮伝来の文庫なのである。早期にその吸収の営為を担ったのは、博士家と呼ばれる典籍講学を専門とする家の人々であった。

一〇世紀を迎えると、中国では雄大な印刷文化が栄え、その時代を採って宋版（宋刊本・宋刻本）と通称される、美術品にも劣らぬ壮麗な典籍が現れた。当時、平安・鎌倉時代、日本の知識層はこれを輸入、重宝し、博士家はこれを摂取して校訂（校勘）の資とした。ここに大陸文化吸収の痕跡に、典籍の校勘という一面が加わった。同時に、日本の漢文典籍

（漢籍）文化は、写本（書写本）と刊本（印刷本）の、言わば二つの川が併流することとなったのである。そして、鎌倉時代、二本の川の受容に余力を遺さなかったのが、北条実時（三十四―三七）であり、今も伝わる金沢文庫の創設者であった。その蒐集に係るものを金沢文庫本と尊称し、後に豊臣秀次（二五八―五五）、徳川家康（二五五―六二）の庇護を受け、江戸幕府・明治政府を経てその主要なものが図書寮に尊蔵されることとなった。そして、私たちは今、わが国に於ける漢籍文化の原点は、この金沢文庫本にこそあるのだと知るのである。翻って、中国では木版印刷による宋刊本の出現とともに、そのもととなった写本が失われていった。また、強大な皇帝権力に支えられた図書文化は、膨大な量の典籍の要点を把握しやすくするために諸書からの抄録（雜篇）や百科全書（類書）の編纂へと向かっていく。この二つの潮流は、印刷文化の確立とともに、旧来の図書が淘汰されていくことを意味した。こうして失われていった書物は軽んじられてい

たわけではない。それ故に、それを復元しようとする学問が、後に輯佚学として提唱されることとなる。

書陵部に保管される金沢文庫本『群書治要』は、中国で失われわが国にのみ伝わった佚存書の最も著名なものである。唐の二代皇帝太宗李世民が、『唐詩選』第一番目の詩で有名な魏徵（ゑいしやう）（五〇）（上）（望）等に命じて、政治に必要な事柄を諸書から抜粋させた。今日教科書で読んでいる『論語』や『史記』もこれに含まれる。もともと五〇巻だが三巻を欠いて四七巻が遺る。『群書治要』はわが国の遣唐使が伝えたと言われる。本書には李世民の「民」字の末画を欠く欠筆（天子や貴人の名前と同じ字を書く場合に、字の一画を省略する慣例）があるのも由来の古さを示している。更に博士家が加点、すなわち訓点を伝えた。この金沢文庫本は北条実時が書写せしめ、博士家の訓点を伝授されたもので、伝来・装丁・書写・読法のいずれをとつても漢籍の原点を物語っている。徳川家康は本書をもとに駿河版『群書治要』を出版し、後に尾張藩も出版、これが中国に逆輸入された。

また、失われるということは実態（書物の内容）が亡佚することだけではない。形が変化したものが遺り、かえって変化以前の姿が伝わらなくなることも失ったことになる。宋代、出版文化が盛んになると、刊本が写本を凌駕する。すると今度は刊本同士が切磋琢磨して形を変えていく。前述の魏徵と

同じ頃、孔穎達（くようだつ）（吾西）（西）はやはり太宗の命で『五經正義』を編纂した。儒教の經典『五經』の注釈書で、これを「疏」と称した。無論当初は写本であつたが、宋になつて政府が版をおこし頒布することとなつた。これを単疏本と言う。しかし、学者はこれを不便とし、注釈だけでなく、本文や古い注も見やすい形で附して流布することを企図した。宋も降つて南宋（二二七—三二七）になるとこれが実現し、注疏本と言うものが主流となつた。そして、単疏本は伝わらなくなつていく。

再び、書陵部に目を転じると、保管される『尚書正義』（二〇）（卷一七）は、中国で全く伝を失つた宋刊単疏本である。そして金沢文庫本である。他に宋刊『五經正義』単疏本は、『易經』（中国国家図書館）、『詩經』（武田科学振興財団杏雨書屋）、『礼記』（身延山）を伝えるのみであるが、日本のものはいずれも金沢文庫本である。これらは当然のことながら、形が古いだけではなく、その文字列も、後出のテキストを比較校勘するに際して、貴重な資料となる。

こうした佚存の実例は、日本の漢文典籍には少なからず見られるもので、その突出した例が金沢文庫の遺品であり、その原姿をもとのままに保ち伝える智恵と技術をみがき続ける宮内庁書陵部の現状を參觀や展示を通して学んでいくことが、日本固有の書物文化を知り、漢文典籍に親しむ道であると思うのである。

置き字はなぜ読まないのか

― 助字の役割と訓読の歴史から考える ―

渡邊 大^{わたなべ だい}

(文教大学)

置き字とは、漢文訓読において読まない助字をいう。①「矣」「焉」(文末に置かれる)、②「於」(文中の補語の前に置かれる)、③「而」(文中に置かれる)等がある。これらの助字は当然、原文(中国語)では音読され一定の機能を果たしている。漢文の文法や原文の語感を把握するためにも置き字の理解は重要である。ではなぜ置き字として読み落とすのか、助字の役割と訓読の歴史から考えてみたい。

1 各字の基本用法

①「矣」「焉」「矣」「焉」は文末に置かれて、話し手の心情・態度をあらわす。「也」(なり・や)のように一定の読み方が定着したものもあるが、断定・疑問・詠嘆など多くの用途をもつ「矣」「焉」にはしつくり対応する読みがなく、置き字として扱われることになった。

「矣」は話し手の判断・決意・疑念などをはつきりと示す。

【断定】朝聞道^{あしたニカバヲ}夕死可矣^{ゆふベニストモナリ}。(論語・里仁)

「焉」は言い切る感じは弱く、余韻を残す表現になる。

【肯定】一日克己^{イチニツニカヘバニ}復礼^{フクレ}、天下歸仁焉^{テニカニニ}。(論語・顔淵)

なお「焉」には「いづくンゾ」「なにヲカ」「これヲ」「ここニ」と読む用法もあるので注意したい。

②「於」 「於」は時間・場所・対象等をあらわす名詞の前に置く前置詞。「A^ス於B^ニ」のように述語Aが「於」の前にある場合、置き字として、名詞Bに「ニ」「ヲ」「ヨリ」等を補って読む。

【対象】君子博学^{クハッ}於文^ニ。(論語・雍也)

「於」に訓点を振ると見た目が煩わしく、読み方も不明確になる。名詞Bの添え字として格助詞を明示する方が日本語の感覚としてもすっきりとするため、この方法が定着した。ただし、「於^{イデ}B^ニA^ス」のように、述語Aが「於」の後に置かれている場合、「於」は「おいデ」と読む。

【対象】民之於^ノ仁^ニ也^ヤ、甚^{ダシ}於^ニ水^ニ火^ニ。(論語・衛霊公)

③「而」 「而」は、二つの語または文の間に置かれて、順接・逆接・累加等、前後の関係をあらわす接続詞である。

直前の語に「テ」「シテ」（順接）、「ドモ」「モ」「シテ」（逆接）等の送り仮名を補って「而」は置き字とするのが一般的である。

【順接】吾十有五而志于学。（論語・為政）

【逆接】心不_レ在_レ焉。視_レ而_レ不_レ見。（大学）

「而」の前後で主語や状況が変わって、「ところで」「ところが」等と訳せるような場合、置き字とせず、「しかシテ」

（順接）、「しかレドモ」「しかルニ」「しかモ」（逆接）等と読む。

【断定】結_レ廬_二在人_一境_二、而_二無_一車馬_一喧_二。（陶淵明・飲酒）

「而」の扱いには厳格な規則はなく、調子や人によって異なるが、人口に膾炙して読み方が固定されたものもある。

2 訓読の歴史と置き字の扱い

現在の学校教育における訓読は、明治四五（一九一三）年、官報に公示された「漢文教授ニ関スル調査報告」を基準とする。本来外国語である漢文を日本語として読みくだす訓読が現在のかたちに落ち着くまでの道のりは長く、置き字の扱いにも幅があった。

「学而時習之」（論語・学而）は、平安時代には訓読みを多用した柔らかなで和文らしい訓読が工夫され、「而」「之」を置き字にして「学ビテ時ニ習フ」と読んだ。室町時代には「而」「之」とも落とさずに「学ビテ而シテ時ニ之ヲ習フ」と読んだ。原文を尊重して外国語として扱い、訓読する際にも

落字（置き字）なく読むべきとする主張がおこったためである。助字の処理にも各々の立場が反映されているのである。

江戸時代には、総じて音読みを主とする簡潔で硬い訓読が好まれた。また、種々の訓読論・訓読法が提唱され、版刻・印刷の普及による読書層の拡大、商業出版の発展が訓点の定型化・効率化を促した。

江戸時代の儒学者、林羅山（一六五三―一七三六）は、「学而時習之」を「学ビテ時ニ之ヲ習ハス」と現在に近い形で読む一方、「則」は古点の訓法を継承して「則」の上の字に「トキハ」を読み添えている。後藤芝山（一七三二―一八二二）は、「レバ則チ」と現在と同じ読み方をしている。佐藤一斎（一七九三―一八五九）は、原文を重んじ、音読みの多用・置き字の回避・送り仮名の削減を徹底した。たとえば「於」は置き字とせずに返り点を用いて「ニ」「ヲ」「ヨリ」と読んだ。

「二 齋_二富_一於_二周公_一」（後藤一斎）

一斎は、過去・完了の助動詞を送らない、「而」が有るときのみ「テ」を送る、「則」が無ければ「レバ」を送らず、条件節を連体形で止める、等の原則を設けて厳守した。しかしその結果、日本語としては不自然なものとなってしまう。訓読はこのような紆余曲折を経て一応の型をもつに至った。置き字は、いわゆるテニヲハのない漢文を日本語として読むための苦心の結晶ともいえよう。

【授業提案】鬼滅の刃は「鬼を滅ぼす刃」!?

——何気ない言葉から漢字の構造を考える

酒井雅巳さかい まさみ

(巢鴨高等学校)

映画版『鬼滅の刃 無限列車編』を見ました。映画が始まる前、後ろの席のお父さんと小学生くらいの女の子との親子の会話が聞こえてきました。

娘「お父さん、『鬼滅の刃』はどういう意味なの?」

父「『鬼を滅ぼす刃』という意味かな。」

それを小耳に挟んだ筆者は、「ふつう目的語は前にこないよなあ」と思ってしまった。完全に職業病です。

中国由来の漢語は「述語+目的語」の順で並んでいます。「読書(書を読む)」のようにです。中国語の語順が「主語+述語+目的語」だからです。日本語の場合は、「私は柿を食べる」のように「主語+目的語+述語」の順番に並びますが、中国語の語順ですと、「我食柿」です。また、修飾する場合は、上から修飾するのが一般的です(後ろから修飾する場合もあります)。これは日本語と変わりません。また、日本語の場合、「私は肉を食べない」のように否定をするときは文末に否定語を用いますが、中国語は「主語+否定語+述語」

のように、述語の前に否定語が置かれます。このような事情から、漢語の構造は以下のようなものに分類できます。

- | | | | |
|------------|---|----|--------|
| ①主語—述語 | 例 | 日没 | 日没する |
| ②修飾語—被修飾語 | 例 | 海底 | 海の底 |
| ③述語—目的語・補語 | 例 | 握手 | 手を握る |
| ④否定 | 例 | 未完 | 未だ完うせず |
| ⑤並列 | 例 | 寒冷 | 救助 幸福 |
| (1)似た意味の漢字 | 例 | 南北 | 善悪 飲食 |
| (2)対になる漢字 | 例 | | |

このほかに似た意味や対になる意味を並べた構造をもつものもあります。

このように、漢語はいくつかの構造をもっています。この構造を知っておくと、新たな漢語に出会ったときに、その意味をある程度推測することが可能です。漢文を学ぶと、このような漢語の構造が理解できるようになり、新たな言葉を獲

得することが楽しくなっています。

「漢文は難しい」とよく耳にします。しかし、日常生活の言葉の中には、多くの漢語が使われています。ふだん使っている漢語を使えば、漢文を学ぶハードルも低くなるのではないかと思います。今回は、日常生活で使っている漢語を使用して、漢文の導入に役立つような授業案を提案したいと思います。

授業案 漢語対決カードゲーム

カードゲームを作って、漢語の構成を学び、語彙を増やそう。

【ゲーム参加人数】二人から五人

【用意するもの】何も書いていないカード

ゲーム前の準備

①カードに漢字一字を大きく書く。

『新編 言語文化』『訓読のきまり』（二二六ページ）や「漢語のいろいろ」（三三二ページ）に掲載されている漢語を二字二文字ばらして書く。これが手持ちのカードになる。一人三枚カードが必要なので、三×人数分の漢字のカードを用意する。

雷
鳴
新
人
読
書
:

②熟語の構造カードを作る。

一枚ずつだと次に出るカードがわかってしまうので、三〜四枚くらい作成するとよい。これが山のカードになる。

主語―述語

修飾語―被修飾語

述語―目的語

否定する語―否定される語

並列（似た意味）

並列（対になる意味）

遊び方

①山のカードを裏返しにして置く。

②参加者に漢字が書かれたカードを裏返しにして配る。

一人三枚。

例 Aさんの手持ちのカード

雷
腹
国

例 Bさんの手持ちのカード

鳴
読
情

③山のカードをめくる。手持ちのカードからめくった漢

語の構造になるカードを選び、場に捨てる。

例 めくられた山のカード

主語―述語

Aさんは手持ちのカードから **腹** のカードを捨てながら「腹痛！ 腹が痛い」と言う。

めくられた山のカードの構造と手持ちのカードを使って作ったカードの構造が一致していれば、そのままカードを捨てられる。一致していなければ手に戻す。

これを続けていき、先にカードがなくなった人が勝ちである。

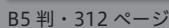
・このゲームのポイントは、同じカードで違う構造の熟語を思い浮かべられるかという点です。先ほど例に挙げた「腹」という字は、**主語―述語**のカードでは「腹痛」でしたが、**述語―目的語**カードのときは、「立腹」や「満腹」、**修飾語―被修飾語**のカードのときは、「腹案」「腹筋」などの熟語が思い浮かべられれば、カードを捨てることができます。一つの漢字に対して、いかに構造を理解した熟語を知っているかが、勝敗につながるのです。

・カードに書く漢字を調整することで難易度を変えることが

できます。また、黒板にあらかじめカードの漢字を使用した漢語を書いておくと、ゲームがしやすくなります。

今の生徒はゲームに慣れているので、難しい顔をしながら漢文を読んでいくよりも、ゲームを通して漢語の構造や返り点の付け方を学んだ方がより深く理解できるのではないかと思います。

冒頭の「鬼滅」の語順の話ですが、この言葉自体が作者の造語だと思えますので、(どの辞書を調べても「鬼滅」はありませんでした)あまり細かなことを気にする必要はないと思います。どうしても決着をつけたい！ というのであれば、「いちご狩り」や「もぐらたたき」と同じように、そのことば自体が一つの語になっていると考えるとよいのかもしれない(構造的には、「いちごを狩る」「もぐらをたたく」と目的語が前になっています)。そうすると「鬼滅の刃」は「鬼滅びの刃」となるでしょうか。この話題で授業をして大いに盛り上がりましたが、どのクラスもだいたい「鬼滅びの刃」で決着がつけました(音の響きなども考慮して作者は「鬼滅」にしたかもしれないね。「滅鬼」だと「メッキの刃」になってしまい、すぐ折れそうな感じがします)。



この教科書の特色

村上春樹まで、近現代の名作を網羅しました。

コーナー「言語文化の窓」

各単元に関連したテーマを扱った「言語文化の窓」を、各単元末に位置づけました。日本語の豊かさや受け継がれてきた文化について

阿蘇の史、盗人にあひて
のがること

牛を繋ぎて逃げぬ。車の後に黄色い三人あり

故事成語に親しむ

われのある物語（故事）から生まれた言葉で、人々によく知られ、しばしば引用される句やことわざ（成語）のことである。日常の文章や会話の中など、さまざまな場面で見られる。

と胸を取りて
こきりて言へば
り。その後、出
れば、みさ
りける。

使っている言葉、あるいは、身ものわり、
使われている語彙構成を捉えてみよう。

トナリヤン、昔、森竹の
勢いで、熊、後、熊勢
の相手が、意地張れた因

言語文化に親しむための資料や情報をまとめた「言語文化の窓」、言葉に関する知識を取り上げたコラム「ことのは」を随所に位置づけました。漢文編では漢語などにまつわる背景知識をご紹介します。

漢語のいろいろ

●漢字の音と訓

雷
ライ
かみなり
…訓
…音

雷田

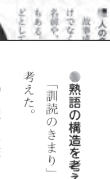
漢字には音読みと訓読みがある。もとの中国の発音にもとづく読みが音、日本語の意味を当てたものが訓である。漢語(字音語)は音で読まれ、和語は訓で読まれる。漢文訓読においては、漢字二文字以上の熟語は音で、漢字一字の語は訓で読まれることが多い。

●熟語の構造を考えよう

「訓読のきまり」(4226ページ)では、熟語の構造を①④に分けて考えた。

① 主語—述語

日没 腹痛 国営



の解説、著名人による古典作品の紹介など、授業で使える充実の内容です。

3 大判(B5判)だからできた、見やすく楽しい紙面

大判の特長を生かした、読みやすくわかりやすい紙面デザイン。生徒の好奇心を刺激する写真やイラストも多数盛り込み、眺めるだけでも楽しめる教科書に仕上げました。

4 授業で使える！ 古文編・漢文編の工夫

教材本文では、見開き単位を意識した紙面構成をし、使いやすいレイアウトを追求しました。古文の助動詞や漢文の訓読など、つまずきやすいポイントについても、わかりやすく徹底的に解説しています。

漢文の入門単元では、生徒がつまずきやすい訓読の基本を徹底解説。教科書一冊で、漢文を読むためのポイントを網羅しています。



日本の漢詩も掲載しています。

題自画
唐詩読罷倚闌干
午院沈沈綠意寒
借問春風何處有
石前幽竹石間蘭

言語文化



A5判・364ページ

ことばがもつ歴史、ことばがつなぐ世界。
新たな「窓」を通して思考力・表現力を養
う、新しい時代の道しるべ。

この教科書の特徴

1 タテとヨコの言語文化

ことばと文化の歴史的な連なりを考える「タテ」、さまざまな地域・国とのつながりを考える「ヨコ」の言語文化。現代文から古文・漢文まで「国語」をこれまでになく広い視野で学べる、唯一無二の教科書です。

2 自ら調べ、自ら深める「探究」

言語文化に関するテーマについて、生徒が自分で調べ、考えを深めるコーナー「探究」を設置。充実の資料をもとに、探究的な学びを

●古文編・漢文編ページ見本

あづま下り

昔、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらず、あづまの方に住むべき国求めにてゆきけり。もより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、まじり行きけり。



八橋「伊勢物語」

「三河の国八橋」といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の橋。狭手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭下りて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたといふおもしろく咲きたり。その跡を見て、ある人のいけり、「かきつばた」といふ文字を句の上にすみて、旅の心を詠め」と言ひければ、詠める。

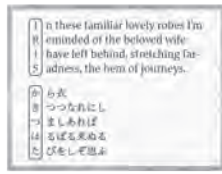
から衣きつたれにしつましあればはるきぬる旅をしぞ思ふと詠めければ、みな人、乾飯の上と涙落として、ほとびにけり。

かきつばたの折句

「伊勢物語」第九段は、最も多く詠まれた日本文学の一場面である。早い時代の絵には、妻平と彼の友、八橋かきつばたが描かれる。しかし次第に、橋とかきつばただけで、「伊勢物語」が連想されるようになった。尾形光琳の傑作「花図」では、かきつばたのただけでこの物語を示している。

不要な部分をそぎ落として洗練させ、連想を大いに働かせる力こそ、能か茶の湯に至るまで、全ての日本の伝統文化の要である。

195



- ① 国名と和歌を手がかりにして、本文をいくつかの部分に分けてみよう。また、それぞれの部分にどのような特徴があるか、考えてみよう。
- ② 「からさ」と「戦河なる」の歌について、「和歌の修辭」(26ページ)を参考にし、折句、枕詞、序詞、掛詞、縁語などの修辭技法を整理してみよう。
- ③ 水の歌のどのような点が人々を感動させたのか、考えてみよう。



●ピーター・マクミラン
詩人、翻訳家
本文は「朝日新聞」
(2012年1月1日)に
よった。



かきつばた

古文作品と現代とのつながり
を考えさせる参考教材を
多数掲載し、興味・関心を
もたせる工夫をしています。
定番の「あづま下り」では
和歌の英訳と訳者による文
章を掲載しました。

漢文と現代日本語をつなげる工夫を満載。漢文学習への意欲を高めます！

実践することができます。

3 大学入学共通テストの問題にも対応

和歌と鑑賞文、古文と漢文の比較読みなど、新しい大学入試にも対応する教材を豊富に収録。新傾向の入試対策も万全です。

4 多彩なコラム

作品を読み解くための技能をおさえる「解釈の視点」、豊かな言語文化を知るための知識を育む「言語文化の窓」に加え、言葉に関する豆知識「言葉のタネ」を設置。用途で使い分けられる構成にしました。

5 図録・資料の充実

巻末図録「日本の伝統文化」では、古くから受け継がれている伝統芸能の演目を季節ごとに紹介。豊富に用意された地図や絵画、資料写真が、言語文化のたしかな理解を助けます。

作品の舞台がイメージしづらい漢文も、地図や図版を多数掲載して、読解に役立つように工夫しました。

蛇足

戦国時代（前掲○三二二）、楚の国のある將軍を、勢いに乗じて齊の國を攻めようとした。その人の論客が、齊へ攻めを思いとまらせようとして將軍を説得した。

楚有祠者。賜其舍人卮酒。舍人飲之。不足。一人飲之。有蛇。先成。者飲酒。

一人蛇先成。引酒且飲之。乃左手画蛇。曰。吾能為之足。

未成。一人之蛇成。奪其卮。曰。遂飲其酒。為蛇足者。終亡其酒。

「蛇固無足。子安能為之足。」

遂飲其酒。為蛇足者。終亡其酒。



（蛇足）『中国成語故事』

① 最初に蛇を描き上げた人が、酒を手に入られなかったのはなぜか、説明してみよう。
② この話から生まれた「蛇足」の語を使って短文を作り、互いに評価し合ってみよう。

漢文から生まれた言葉

昔の中国のできごとがもたらした言葉が故事成語という。日常で何気なく使っている言葉も、実は中国の故事に由来すること多い。

今日のテストのときは「完璧」だった！

この小説の最後の一文は「蛇足」だね。

故事成語の由来を知ると「完璧」のような書き間違いが減るかもしれない。現代では、意味が変化したものもあるので、その用いられ方に確認してみよう。



（蛇足）『完璧』

戦国策 ひとくくりに
前漢の劉向（前漢・前二）の編纂した戦国時代の政治家たちの言行をまとめた文書

言葉に関する知識を取り上げたコラム「言葉のタネ」で、言葉への興味・関心を深めます。

言葉のタネ

① 「髪」を用いる慣用句

中国には「髪」を用いる慣用句が多くある。私たちも日常よく使う「危機一髪」は、「其の危ふきこと」一髪の千鈞を引くがごとし（その危うさは一筋の髪の毛で千鈞（約一八〇㌔）の重さを引くかのようだ）（韓愈『孟尚書に与ふる書』）といったえいともづく。「白髮三千丈」（李白『秋浦の歌』）は、自らの老いに気づいた驚きを表した名句として知られる。「三千丈」は、およそ九キロメートル（愁へに緑りて聞くのごとく長し（愁いのためにこんなに長くなってしまった））と続く表現の奇抜さは、詩人ならではのユーモアの現れでもある。いずれもスケールの大きさは共通なのかもしれない。

● おもしろい話
【助費】手助けをしようとして、かえって害を与えること。
田 農夫が、苗を早く成長させようと引つ張ったところ、枯れてしまったという故事。（孟子）
● 不確かな情報で、不安を助長する。
【矛盾】 つじつまが合わないこと。
田 商人が、売り物の「どんな堅い物でも突き通す」と「どんな鋭い物でも突き通せない盾」を自慢したところ、客にその矛でその盾を突いたらどうなるかと問われ、答えられなかったという故事。（韓非子）
● 理想と現実とはしばしば矛盾する。
【創作にかかわる話】
【推察】詩や文章を何度も繰り返し直すこと。

古典に親しむ、理解を深める
付録も充実！

日本の伝統文化



浄瑠璃 歌舞
浄瑠璃は、江戸時代を起源とし、江戸時代と結びついて、人形浄瑠璃、歌舞浄瑠璃、文楽、歌舞伎は中世から明治時代にかけて、浄瑠璃の文化として発展を遂げた。浄瑠璃の文化は、江戸時代から明治時代にかけて、浄瑠璃の文化として発展を遂げた。

落語



落語家・三ツ又三郎 (落語家・三ツ又三郎)



現代と古典を比べてみよう

鉄道で比べてみよう
平安時代から明治時代まで、鉄道は日本の交通の中心となってきた。現代の鉄道は、日本の交通の中心となってきた。

恋愛で比べてみよう
平安時代から明治時代まで、恋愛は日本の文化の中心となってきた。現代の恋愛は、日本の文化の中心となってきた。

重宝で比べてみよう
平安時代から明治時代まで、重宝は日本の文化の中心となってきた。現代の重宝は、日本の文化の中心となってきた。

ライフスタイルで比べてみよう
平安時代から明治時代まで、ライフスタイルは日本の文化の中心となってきた。現代のライフスタイルは、日本の文化の中心となってきた。

新編言語文化

言語文化

新編言語文化



これからの社会で必要な「共感する力」「考える力」「伝え合う力」を、ステップごとに高める教科書。
B5判・238ページ



大判ならではの美しい紙面で、楽しみながら言語文化のつながりが実感できる、画期的な教科書。
B5判・312ページ



実社会で生きる実践的な「話す・聞く」「書く」「読む」力を育む、新時代の国語教科書。
A5判・286ページ



ことばがもつ歴史や世界を知り、さまざまな視点から思考力・表現力を養う、新たな時代の道しるべ。
A5判・364ページ

充実のラインナップ！
大修館書店の新教科書



【授業提案】『論語』『孟子』から新たな四字熟語を創作する

ありき だいすけ
有木大輔

(筑波大学附属駒場中・高等学校)

一、四字熟語から漢語の構造を学ぼう

『言語文化』漢文編「1 漢文に親しむ」は、『論語』や『孟子』に触れつつ漢語の基本構造を理解する単元である。教科書では二字の熟語で「述語―補語」「修飾語―被修飾語」などの構造を分析するが、四字熟語を用いた方がより発展的な授業となる（学習指導要領「知識及び技能」（1）ア、ウに相当）。先ず四字熟語が短い漢文の形であることを理解させるために、漢字を数字に置き換えて「①②③④、①②④③、①③②④、①③④②、①④②③……」と、順列の総数二十四通りをすべて板書する。その中で漢文として返り点が付けられるものは十九例あることを確認する（※ただし三字句に返る「②③④①」の形はカウントしない）。そして、その順番になる四字熟語を「①②④③↓天衣無縫」「①③②④↓先從隗始」と並記していく。思いつかないところは『四字熟語辞典』を引いて探させることが望ましい。

二、『論語』から生まれた四字熟語を知ろう

教科書で既習の『論語』十一章が出典となっている四字熟語「十五志学」「五十知命」「有朋遠来」「訥言敏行」「過猶不及」「温故知新」などを提示する。それぞれの意味を再確認してから、四字熟語の構成パターンを整理する（学習指導要領「知識及び技能」（2）ア、エに相当）。

①「過猶不及」

漢字四字をそのまま抜き出した例である。後で生徒が創作する際に試みがちな方法であるが、「巧言令色」や「怪力乱心」のように、めばしいものは既に四字熟語として定着している。

②「温故知新」「十五志学」

「而」や「于」のような助字を省いて実字の四字で創作する手法である。これが一般的な創作方法と考える。

③「訥言敏行」

「欲」や「於」を省いたところは②と同じだが、主語の「君子」も省略し、キーワードとなる四字だけを抜き出す方法。

④「有朋遠来」「五十知命」

「遠方」を「遠」、「天命」を「命」と、二字の熟語を一字で表した例である。上の字が下の字を修飾している熟語、あるいは同じような意味の漢字を重ねた熟語の場合にいずれかの一字を省くことが可能である。

三、四字熟語の定義について話し合いをしよう

次に挙げる二例は四字熟語として認知されているようだが、果たして適切かどうか話し合うのに値する素材である（学習指導要領（思考力、判断力、表現力等）B読むこと（2）イに相当）。また、生徒に自分ならばどのような四字熟語にするかで提案させるとなお良い。

①「学思罔殆」

この熟語は為政篇「学而不思則罔、思而学則殆（学びて思はざれば則ち罔し、思ひて学ばざれば則ち殆し）」のキーとなる四字であるが、この四字だけでは書き下し文にならない。あえてこの四字を日本語訳にしようとするならば、「学んで思うことは啓蒙されないし危険である」と逆の意味になってしまい、典拠ありきで正しく意味が伝わる四字熟語で

ある。むしろここでは「不思則罔／不学則殆（※もしくは学不思罔／思不学殆でも可）」と別々の四字熟語に分けたほうが良いだろう。

②「七十従心」

七十歳のことをを漢字二字で「従心」ということは『新漢語林 第二版』に、

【従心】ジュウシン こころにしたがう。心のままに行動する。転じて、七十歳をいう。『論語』為政篇に「七十而従心所欲不踰矩」とあるのに基づく。

とある。しかし、為政篇「従心所欲（心の欲する所に従へども）」は条件節であり、「不踰矩（矩を踰えず）」が主文にあたる。そこで、原文にない「在」を補って「従心在矩」とする方がこの章句の意味に通じるのではないか。しかし、他の年齢の「十五志学」「三十而立」「四十不惑」「五十耳順」と統一感がなくなってしまうため、生徒に工夫させたい。

四、『論語』から新たな四字熟語を作ってみよう

生徒に『論語』の章句から新しい四字熟語を創作させる（学習指導要領（思考力、判断力、表現力等）A書くこと（2）ア、イに相当）。教科書所収の十一章では数が少ないので文庫本などで『論語』の全文を用意させたい。次に教科書所収の章句から生徒が作成した例を挙げる。

作成例1 「好學短命」 カウガクタンメイ

〔書き下し文〕 學を好むも短命なり

〔意味〕 顔回のように将来を囑望されたが短命だった人物のこと。

〔出典〕 哀公問、「弟子孰為好學。」孔子対曰、「有顔回者。

好學。不遷怒、不貳過。不幸短命死矣。今也則亡。未聞好學者也。」（雍也篇）

類義語…美人薄命 佳人薄命 才子多病など

作成例2 「終身行恕」 シウシンカウジョ

〔書き下し文〕 終身 恕を行ふ

〔意味〕 生涯実践しなければならないこと。転じて、最も大切なことを一言で表現すること。

〔出典〕 子貢問曰、「有一言而可以終身行之者乎。」子曰、「其恕乎。己所不欲、勿施於人。」（衛靈公篇）

四字熟語を創作した時にその言葉が既に四字熟語として定着しているかどうかは『四字熟語辞典』の漢字索引などで確認させたい。もし自分が創作した四字熟語が辞書の中にあれば必ずその項を引かせて、出典が同じであるかまで確認させた。生徒が創作した四字熟語は、同時にその意味も記すことによって生徒の『論語』の内容理解の深化に繋がる。教科書

掲載外の章句から四字熟語になりそうな箇所を探し読むうちに、知らず『論語』を読み込むきっかけにもなるだろう。また、作成例のように書き下し文や訓点文も付いたり、類義語・対義語なども付して辞書の項目のような体裁で統一させ、生徒の作品を小冊子にすると、教え合い・学び合いの協働学習にも繋がる。

四字熟語を創作するにあたり、同時に書き下し文も作成させて漢文の文構造を理解させることが本実践のねらいであるが、さらに発展として平仄や声調といったリズムにも意識を向けさせたい。そもそも中国の韻文に見られる最も古いリズムは四言詩であり、四字熟語と通じるものである。

本実践のねらいは、漢字を用いて自分の考えを表現することである。近い将来、生徒が親になった時に子どもに命名することは、漢字でその子への愛情を表現することに繋がる。もともと近年は初見で読めない名前が増えているのは、漢字を用いた「書くこと」の経験が不足しているからであろう。その意味でも、本実践は、これからの国語が求めている「生きる力」を身につけることになるだろう。

【授業提案】寓話を用いた「言語文化」の授業提案

加藤文彬
かとう ふみあき

——「黔之驢」と『伊曾保物語』の比べ読み

(茨城工業高等専門学校)

一、『伊曾保物語』との比べ読み

「黔之驢」は、唐代の柳宗元の手による「三戒（三つの戒め）」のうちの一つである。序文に拠れば「三戒」は、己が社会の中でどのような存在であるのかを理解せずに振る舞う者達を憎み、「麋・驢・鼠」の三者が「禍」に至るまでの話に仮託して戒めとしたものであることがわかる。

動物を用いた寓話は、『戦国策』『虎の威を借る狐』など、中国においてはポピュラーなものであり、授業の導入の際に紹介したい。他の例を問えば、「アリとキリギリス」等の『イソップ物語』を元とした話が挙がってくることが予想される。

イソップは実在の人物であり、『イソップ物語』の約半分はその伝記で構成されている。また、日本国内で流通したものとしては、天草学林で出版されたローマ字・口語体の『イソポのハブラス』と、国字本の『伊曾保物語』がある。

今回提案する授業では、『伊曾保物語』「獅子王と驢馬との事」を読ませ、「黔之驢」との比べ読みを通じて中国古典の表現について考えさせたい。

構想Ⅰ『伊曾保物語』を読み、その教訓について考える。

ある時、驢馬、獅子王に行合ひ、「いかに獅子王。我が山に來たり給へ。威勢の程を見せ参らせん」といふ。獅子王、おかしと思へども、さらぬ体にて、伴ひ行く。山の傍におゐて、驢馬、おびたゞしく走り廻りければ、その音に恐れて、狐、狸などいふもの、こゝかしこより逃げ去りぬ。

驢馬、獅子王に申しけるは、「あれ、見給へや、獅子王。かほどめでたき威勢にて侍る」と誇りければ、獅子王、怒つて云はく、「奇怪なり、驢馬。我はこれ、獅子王なり。汝等が如く、下藹の身として、尾籠を振舞ふ事、狼藉なり」とて、いましめられて、罷り退く。

「下藹（卑しい身分）」「尾籠（無作法）」「狼藉（無礼）」を

除けば難解な語はないので、生徒同士で読ませてでも解釈は充分可能であろう。この寓話から如何なる教訓が導き出されるかは授業での楽しみとして、『伊曾保物語』では、「それ、下輩の身として、人と争ふ事なかれ。やゝもすれば、我が身の程をかへりみずして、人と争ふ。果てには恥辱を受くものなり」と、普遍的な処世術を示している。

さて、この寓話は少なからず「黔之驢」と似通っている。そこで以下の発問をしたい。

構想2 比較の視座 ①相手の能力を知っているかないか、②表現のリアルさの有無

①については、『伊曾保物語』では獅子王は最初から驢馬の能力を知っていたのに対して、「黔之驢」では、虎は驢が如何なる存在なのかを理解していなかったということ、そこから「獅子王は最初から驢に対して『おかし』と思っていたが、虎は『甚だ恐れて』いた」等、原文に即した理解ができれば良い。

②については、『伊曾保物語』では「いましめられて、罷り退く」とあつてなく終わっているのに対して、「黔之驢」では「断其喉尽其肉」と驢が殺される描写が非常にリアルに語られていることを読み取りたい。

改めて「黔之驢」を見れば、この寓話がリアリティをもつて語られていることに気づくだろう。例えば「黔」という実

在の地名を使用している点もその要素の一つである。陶淵明「桃花源記」が「晋太元中、武陵人捕魚爲業。…南陽劉子驥、高尚士也（晋の太元中、武陵の人魚を捕うるを業と爲す。…南陽の劉子驥、高尚の士なり）」と、実在の時空・人物を登場させているのも同様であり、参考として与えても良い。

二、「三戒」の中の「黔之驢」

「黔之驢」の表現はリアルさを追求していたが、それは「三戒」において徹底されている。例えば「臨江之麋」では「狼藉道上（道上に狼藉たり）」と、野犬が麋に群がって食ひ散らかす様子が描かれ、「永某氏之鼠」も「殺鼠如丘、棄之隱処、臭数月乃已（鼠を殺すこと丘の如く、之を隱処に棄つれば、臭数月にして乃ち已む）」と、死骸から漂う腐臭まで細緻に描写している。何故「三戒」にリアルさが要請されているのか、その理由を制作時期から考えたい。

順宗皇帝が即位すると、柳宗元は改革派の一人として活躍するが、宦官等の手によつて永州の司馬へと左遷される。「三戒」が制作されたのはこの時期であるとされる。さればその表現の背後には、社会に対する憤激と、左遷された己を見つめる視点とがあると考えることができよう。

さて、ここで「三戒」の内容を確認しておきたい。麋は自己が飼い主の庇護の元にある存在であることを知らずに、思

うがままに振る舞ったことで殺されてしまう。驢は怒りにまかせて虎に立ち向かい、力量を悟られ殺される。鼠は家主に守られていることを知りながら、それを利用して傍若無人に振る舞っていたが、家主が変わった途端に排除されてしまう。

松本肇氏は、ここに権力の恐ろしさを読み解く^(注1)。その観点から見ると、権力（飼主）に庇護されていることを知らない麋と、権力（家主）に守られていることを笠に着ている鼠と、どちらも権力との関係性の中で己の位置を見失うものに対する戒めとなっていると言える。一方で驢の話は、寧ろ権力（虎）に立ち向かったことで「禍」に至ったことに主眼が置かれている。更には、「今若是焉。悲夫（今是くの若し。悲しき夫）」という表現からは驢への同情も読み取れる。

ならば、麋・鼠の二者は他者（宦官等）に向けた戒めとしてであり、驢は権力に立ち向かい左遷された自らの表象として、つまり「黔之驢」の「戒」は表現者自身に向けられたものとして捉えることが可能である。すなわち、死後も腐臭をまき散らす鼠の描写からは、宦官（社会）に対する憎しみの強さを、喉を食いちぎられる驢のリアルな描写からは、左遷を招いた己への戒めの強烈さを読み取ることができよう。

あるいは、鼠のみ他と異なったトーンで描かれているという解釈も、三者全てが自戒をこめて書かれたものであるという解釈も可能であろう^(注3)。授業時間に余裕があれば、上記のよ

うな時代背景を説明した上で、三つの「戒」がそれぞれ誰に向けられたものかをデイスカッションしても良い。

三、まとめ

柳宗元にとって寓話を記すという行為は、現実での鬱憤をぶつけることであり、現実で果たし得ない理想の体现であり、他者への批判であり、表現者自身に向けられた自戒としてである。その志向が強ければ強いほど、表現はリアルであることが要請される。「三戒」について言えば、実在の場所を登場させることや、食ひ殺される描写のリアルさなしには、社会への憤激・自戒は表現され得ない、ということである。

「黔之驢」は教材として定番化されてきたが、「言語文化」の授業であるからこそ、様々な文献との比べ読みが可能である。結果として中国古典が持っているリアリティ重視という一側面を鮮やかに照射することができるのである。

〔注1〕 松本肇『柳宗元研究』（創文社、二〇〇〇）。氏は「黔之驢」とやや似た話として、『イソップ物語』「初めて見られた駱駝」を紹介している。

〔注2〕 加藤敏「元結の散文における寓言について」（『千葉大学教育学部研究紀要』五八、二〇〇）

〔注3〕 鎌田正監修『漢文名作選6 故事と語録』（大修館書店、一九九

二〇二一年度大学入学共通テスト

「国語」 漢文の分析と指導

北澤 紘 一
(代々木ゼミナール)

概要と本文の要旨

二〇二一年度大学入学共通テスト「国語」漢文は、【問題文Ⅰ】北宋・欧陽脩の五言古詩「有馬示徐無党」（馬有りて徐無党に示す）（『欧陽文忠公集』所収）と、【問題文Ⅱ】『韓非子』喻老篇の一節からの出題である。欧陽脩（一〇〇七～一〇七二）は、字は永叔、号は醉翁・六一居士、諡は文忠、北宋の政治家・詩人・文人・歴史家であり、唐宋八大家の一人に数えられる名文家である。副宰相として王安石を登用し新法を支持したが、いざ新法が実施されると強硬な反対派に転じた。「有馬示徐無党」は、弟子・徐無党に与える教訓という形を取っている。『韓非子』は、中国戦国時代の法家の思想家・韓非（前二八〇頃～前二三三）の著書である。分かり易い説話を引用して、信賞必罰の法治主義を説いた書であるが、中には後世の加筆であって、韓非の思想とは異なる部分もある。喻老篇は『老子』の注釈を主な内容としており、韓非の自著ではない可能性がある。

設問の解説

前年度センター試験に引き続き五言古詩が出題された。本文の字数は【問題文Ⅰ】が一一〇字、【問題文Ⅱ】が六六字で、前年度センター試験より七六字増加した。設問数は六問、マーク数は九箇所、マーク数が前年度より二つ増加した。リード文に「いずれも馬車を操縦する『御術』について書かれたものである」とテーマが示されており、【問題文Ⅰ】【問題文Ⅱ】ともに、御術において人馬が調和することの重要性が説かれている。試行調査同様、問題文に複数の文章が出題された。ただし、問題文が一文であった場合と読み方を変える必要はない。設問で問われている知識・内容、難易度は標準的であり、センター試験と変わらない。問3・問6は【問題文Ⅰ】【問題文Ⅱ】両方を使う形式になっているが、特別な解き方を要するものではなかった。

【問1】波線部「徒」・「固」の同義語を選ぶ問題

設問文で「ここでの意味と、最も近い意味を持つ漢字」が

第4問 次の簡體文の「何」と「固」の文章は、いずれも漢文を基礎とする。訓讀について、書きかたのあるものがある。これらを選んで、後で問う問題にも答えて、なお、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。(配点 50)

【問題文】

吾有千里馬。毛骨何蕭森。疾馳如奔風。白日無留陰。徐驅當大道。步驟中五音。馬雖有四足。遲速在吾心。東西與南北。高下山與林。惟意所欲適。九州可周尋。至哉人與馬。兩業不相侵。伯樂識其外。徒知面千金。王良得其性。此術固已深。良馬須善取。吾言可為箴。



馬車を走らせる御者

【問題文】
王良は趙の良王に仕える御者であり、「御馬における師でもある」とある。良王が王良に馬車の御者職へを授け、三田養生し、三回とも勝った。くやしがな良王が、まだ御馬のすべを教えないのではいかと訪ねると、王良は次のように答えた。

凡御之所貴馬也。安于車人心調于馬而後可以進速。致遠。今君後則欲速。臣先則恐速于臣。夫語道爭遠。非先則後也。而先後心在于臣。尚何以調於馬。此君之所以後也。

(「御馬子」による)

求められている。センター試験でも「同じ意味・用法を持つ語」が問われたことがあるが、実質は同じ読みを持つ漢字を選ぶ設問であつた。本問も同じ読みを持つ漢字を選べばよい。

(ア)「徒」は、「ただ」「いたづらニ」(無駄に・空しく)等と読む。「たダ」という読みを持つ漢字は選択肢①「只」、「いたづらニ」と読む漢字は選択肢中にない。

(イ)「固」を「かたシ」「かたム」と読むことは漢文ではまれである。主に「もとヨリ」(元来・もともと・言うまでもなく)と読む。⑤「本」が、「もとヨリ」と読むことのできる漢字である。①「強」を選ぶ受験生が一定数見られた。「強固」という熟語からの発想であろう。「徒」「固」や選択肢に挙げられている漢字はどれも頻出漢字であり、漢文重要語として指導しておきたい。

【問2】波線部(1)「何」・(2)「周」・(3)「至哉」の解釈問題

(1)「何」は、「なにヲ」「なにニ」「なんノ」「いづくニカ」といった読みもあるが、「なんゾ」と読むことが圧倒的に多い。「何」は、「何」(どうして—か)という疑問形、「何」(どうして—か、いや—ない)という反語形のほか、「何其—也」(なんと—なことか)という詠嘆形に用いられる。漢詩の字数の制約から、詠嘆形であると見抜く目印となる「其」「也」が欠けており、④「どうして」と⑤「なんと」とで迷う。詠嘆形「何(其)—(也)」の一部分には、状態・性質を表す

語が入る。今回「何」の下の「蕭森」には「ひきしまつて美しい」という注が付けられており、ここは詠嘆形。「毛骨何蕭森」は「馬の毛なみと骨格がなんとひきしまつて美しいことか」といった意味である。句形について、読み・意味に止まらない正しい理解を支援したい。

(2)「周」は、「あまねク」と読み、「すべてに広くゆきわたるさま」を表す。(3)「あらゆるところに」が正解。直前「九州」に付けられた「中国全土」という(注)もヒントになっており、正答率が高かった。「九州可^シ周^ル尋^ヌ」で「中国全土あらゆるところを訪ねることができるといった意味。

(3)「至^{レル}哉^{かな}」は、句形・漢字の知識を問うものではなく、文脈理解を試すものである。直後に「人^ト与^レ馬^ト、両^レ楽^不相^侵」(人と馬とが双方とも楽しみ互いに邪魔をしない)とあり、これに合うものは④「このような境地にまで到達できるものなのか」である。①「遠くまで行く」③「高い山まで登る」⑤「速く走る」のように、距離・標高・速度に限定するのは不適当。②「人の気持ちが理解できる」は主体を馬だけに絞っており、直後「人^ト与^レ馬^ト」(人と馬とが)と合わない。

【問3】傍線部Aの空欄補充問題

漢詩句末の空欄補充は、まず押韻で選択肢を絞る。【問題文Ⅰ】は、絶句・律詩・排律といった近体詩ではなく、古詩であるが、五言詩であれば基本的には偶数句末で押韻すると

考えてよい。押韻しているかどうかは、漢字の音読みの母音部分で判断する。偶数句末の漢字は、「森」shin・「陰」in・「音」in・「琴」kin・「林」rin・「尋」jin・「侵」shin・「金」kin・「深」shin・「箴」shinと、母音部分はすべてinとなっている。②「心」shin・③「進」shin・⑤「臣」shinに絞る(近体詩で用いられる平水韻によれば、「心」「進」「臣」は同じ韻目ではないが、高等学校の学習範囲ではない)。

次に傍線部全体の意味を考える。「馬には四本の足があるが、遅速は私の心にある」と訳せれば、「私の心」が適切であると判断できる。「私が進む」「私の臣下」では文意が通じない。押韻で選択肢が絞れずとも、意味だけで正解が得られる選択肢構成になっており、正答率は高かった。

【問4】傍線部B白文の返り点と書き下し文との組合せ問題

白文の返り点の付け方と書き下し文との組合せを選ぶ設問である。センター試験でも白文傍線部の多くは、この形式で読みが問われ、正答率の低い難問が出題された。今回も最も正答率の低い設問となった。なお、選択肢上段の返り点は、下段の書き下し文に合わせて付けられており、上段返り点と下段書き下し文とにずれがないかを確認する必要はない。

傍線部に含まれている重要漢字「所」「欲」に注目する。「所」は、基本的には下の語から返って「所^{スル}」の形で、「―するところ・こと・もの」という名詞句を作る。「欲」は、

下の語が活用語であれば「欲^ス」と読み、「―したいと思う・しようとする・しそうだ」等と訳す。「所欲^{セント}適」を「―(せ)んと欲する所」と読んでいる選択肢は、④「惟だ意の適かんと欲する所にして」しかない。誤答②が多く見られた。②「意ふ所」と読むためには、「所^ツ意」という語順でなければならぬ。③「欲する所」と読むと、末尾の「適」一字だけが浮いてしまう。漢文知識の習得が、いわゆる句形だけに限定されてしまうと、本問のような分かり易い句形を含まない傍線部に苦戦することになる。「所」も「欲」も頻出漢字である。句形を構成しない漢字も正しく指導したい。

【問5】傍線部Cの解釈問題

「後^ル則^{バチ}」(後れると) 「先^シ則^{バチ}」(先行すれば・前に出ると)の対に注目すれば、⑤「あなたは私に後れると追いつくことだけを考え、前に出るといつ追いつかれるかと心配ばかりしていました」を選ぶ。「先^シ則^{バチ}人、後^ル則^{バチ}為^ル二人所^ト制^{スル}」(先手をとると人を支配し、遅れをとると人に支配される)という故事成語を学んでいた受験生は、速やかに正解を選ぶことができ、正答率は高かった。「後^ル則^{バチ}為^ル二人所^ト制^{スル}」は受身形の例文としてよく用いられるものである。句形を指導する際には、創作例文ではなく実際にある古典を使用したい。

【問6】【問題文Ⅰ・Ⅱ】全体の内容把握問題

【問題文Ⅰ】に「良馬^ハ須^{マツ}善^ニ善^ニ馭^ヲ」(良い馬にはすぐれた御者

が必要である)、【問題文Ⅱ】に「凡^ツ御^ノ之^ヲ所^ハ貴^ニ、…人心^{カネヒ}調^ニ于馬^ニ」(御術で貴ぶことは…人の心が馬と調和することである)とあり、「馬と一体となつて走ることも大切である」とする③が正解である。「他のこと」とは王良の位置である。

①「馬を手厚く養う」「よい馬車を選ぶ」②「馬の心のうちをくみとり」④「馬を厳しく育て、巧みな駆け引きを会得する」⑤「訓練場だけでなく、山と林を駆けまわって手綱さばきを磨く」は【問題文Ⅰ】にも【問題文Ⅱ】にもない。消去法で正解が得られるためか、正答率は低くなかった。

予想と対策

初の大学入学共通テストである。複数の問題文が出題された点は注目されるが、設問は形式・内容・難易度にわたりほぼセンター試験を踏襲したものであった。第二日程の漢文は、本文・設問ともにセンター試験と大きな差異はなかった。今後も複数の問題文、故事成語に関係する本文の出題が予想されるが、読解・解答に必要な力は、従来と変わるわけではない。漢文に由来しわが国の言語文化を形成する漢字・語句・定型表現(句形)・漢詩・故事成語等の正確な知識、選択肢を使って解答するテクニクではなく自力で本文を読解する力、読み・意味を覚えるだけではなく用法にまで踏み込んだ正しい理解が重要である。

「ながめて楽しい漢字5万字」 で日本を知ろう

やすいふさこ
安居総子

(元岐阜大学教授)

一、「漢字5万字」は魔法の宝庫

B 全判の「漢字5万字」を広げると、「へえー」「すごい！」「こんなにたくさんあるの？」の感動から始まって、「これって全部漢字なの？」「これは日本の？それとも世界の？」「ー」「ー」「ー」も漢字なの？」「『々』はよく見るけど読み方はあるの？」「などの問いへ、さらに、「从」「𠂇」「𠂇」などの字を発見して、「おもしろい」「まだなにかあるぞ」といった新たな感動で教室が湧きます。こういう現象を呈するのは、この表が、「ごまんとある漢字が一望できる」「一見して確認できるなぞときがある」といった魔法を持っているからです。この魔法からスタートし、人間の脳に新しい知を作り出したいと思います。実際に教室で出た「問い」は、こんなふうに整理できます。

A 「この表の漢字、ほんとうはいくつあるの？」「この漢字は日本のもの？日本と

中国以外に使っている国は？」「国によってどのように変化したの？共通しているものはあるの？」

A' 「部首ってなに？いくつあるの？」「画数の一番多い字は？」「『一』や『一』も文字なの？どう読んで、どんな意味があるの？」「日本には国語辞典と漢和辞典とあるけど、どう違うの？」

B 「色別になっているのはどうして？」「この分類はいつ、どうやってできたの？」「色なしの漢字は覚える必要はあるの？」

C 「私の名前に使われている漢字はどこにあるのかな？」「自分の子供が生まれて名前をつけるとしたら、どうやって字を選べばいい？決まりはあるの？」

A と B は簡単に答えが出ます。つまり、漢字について知っておくべき基礎知識です。一方、C は学習者にとっては学びへの糸口です。

二、「学び」はこんなふうに

「ながめて楽しい漢字5万字」を、図書室や教室に掲示することは、言語環境を整える意味で重要です。しかし、それが学びに直接有効にはたらくとはいえないようです。まずは学びの「場」を作りましょう。学びの場作り（授業）のヒントを示します。

活動1

A 「私の好きな漢字」

①好きな漢字を三〜五字選び、選んだ理由をメモする。

②その中の一字を表現する（毛筆で書いて掲示する、フリップを用意してスピーチ、文章を書いて読みあう、二つを組み合わせてもよい）。

イ「今月（今年）の漢字（目標）」

①自分で選んだ漢字と、その理由をメモする。

②アの方法と同じく、掲示やスピーチを行ったり、文章に書いて文集にしたりして楽しむ。

*応用として「私の十年後、三十年後」などを考えさせるのもよい。

ウ「私の一年間は□だった（振り返り）」

①漢字を選びコメントをつける（「今年

の漢字」と比べる。

活動2

工命名する（題をつける）

①画いた絵、撮った写真、文集などのタイトルを、漢字の字数の枠（二とか四とか五）を決めて考える。

②命名した理由を話し合う。

オ命名の調査をする（フィールドワークと発表）

星の名、暦（二十四節気など、古来のもの）、米・日本酒・果物・菓子などのブランド名、店名、会社名などの調査。グローバル学習も可能です。

三、知っておくべき基礎知識

Bの色分けについては、ポスターを見てもらうとして、AとA'について考えるためには、現代の漢字について知る必要があります。二〇二〇年現在、日本で使われている（日常生活に必要で、学校教育で学習する）漢字は、次のように整理することができます。

①常用漢字二、一三六字（うち教育漢字は一、〇二六字）、人名用漢字八六三字、合計二、九九九字。生まれてくる子に名前をつけるときには、この常用漢字、人名

用漢字から選んでつけることになっている。

②情報交換用漢字符号、所謂JIS（日本工業規格）漢字は、一、〇五〇字（第一水準二、九六五字、第二水準三、三九〇字、第三水準一、二五九字、第四水準二、四三六字）。日本の地名・人名すべての調査が終わったのが二〇〇四年、日本の地名、人名は全部パソコンで打ち出せる。

③漢字を使っている地域を漢字文化圏という。東アジア文化圏で、日本、中国、台湾、韓国、ベトナム（古い時代に使われていた）。中国で生まれた漢字がほぼそのまま使われているのが台湾、日本と中国はそれぞれの国で簡略にした字体を作った。簡略化は日本が先で中国があとからだ、その方法は異なる。その異同を記しているのが、「国際符号化文字集合（UCS）」二〇、九〇二字で、漢字文化圏で国際的に仕事をする人は知っておく必要がある。辞典は学習のための道具ですから、国語辞典、漢和辞典と二種類あることを知って上手に使いこなすことが必要です。

新刊紹介

「ながめて楽しい 漢字5万字」

大修館書店編集部編

B全判・一枚

定価、¥1,500（本体、¥1,350＋税10%）



世界最大の漢和辞典、諸橋轍次著『大漢和辞典』に収録されている、5万字以上の漢字を、伝統的な部首配列で収録しました。教育漢字・常用漢字・人名用漢字には色をつけて探しやすいです。

ポスターには丈夫なユボ紙を使用しているので、折り目がかすれたり、破れたりしにくく、教室の掲示にも最適です。